79
359

禪學論

近重真澄著

019616-000-6

79-359

禪学論

近重　真澄／著

M44. 8

ABG-0396

79
352

京都帝國大學
理科大學教授 理學博士 近重真澄著

禪學論

東京 服部書店

79-359

禪學論

明治
44. 8. 24
内志

自序

葡萄の美酒之を喫して快哉と絶叫するものあり。一醉陶然玉山頽れて語らざるものあり。要は只その喫處に在りて語處にあらず。余が吸々の長舌も。唯一聲快哉と叫べるのみ。之に憑て直に禪機を求めんと要せば。他の一鼓舌に笑はれん。且夫禪すでに唯心と說く。知らず心身脫落して能く一元に歸するを得るか。萬法は一に歸す。一遂に何處にか歸する。是會すべくして說くべからざるなり。說くことを知つて喫することを知らずんば。その一元たる。はた烏にか求めん。諸子乞ふ先づ去つて左の一句に參ぜよ。云如何是心

誠堂主人　識

禪學論

目次

第一章　總論……一

三段論法と一段論法：不立文字敎外別傳の禪

第二章　宗敎哲學及び科學……六

宗敎：哲學：科學：宇宙存在の認定：科學上の事實：五感の價値：物質及びエネルギーのの二元：二元の不生不滅性：宇宙寂滅の期に到れば物遂に一に歸し一も亦知るべからず：物が心乎心が物乎：時間及空間は現在已に寂滅の状態に在り

第三章　科學の價値……二八

科學學者の戒心：科學者の安心：三段論法は果して能く宇宙の開發を完ふすべきか：相對的知識の欠點：相對的知識は只一時的眞理なり：宇宙間の研究は須く體用二途に於てすべし

第四章　禪の境涯……四四

如何にして事實的本體を得べき歟：兩頭倶截斷：一劍倚天寒：無差別平等則ち體と無平等差別即ち用：無相の相は禪の眞境なり：無想の相は無念の念にして始めて得べし：禪の範圍：以心傳心の修行：相對の場より絕對を求めんとするの失：數學上に於ける禪機：正が負に等しく萬が一に等し：玄の又玄道ふこと莫れ只是狂言と

第五章　禪と學術……六五
萬は一に非す…正は負と異なれり…騫直に去れ
禪は凡て學術を包括す…根本智及び後得智…根本智と後得智との關係…佛說は世說と矛盾するも…是に於て…禪境は却て精なる處にあり
第六章　禪と人道……七九
禪の宗教たる所以…死生の問題…思案の外は正禪禪の領域なり…人事を盡し天命を待つ…何ぞ膽力養成とい…禪は世上の艱難を畏るゝ者…善に非す…至誠息む…善惡の辨…何ぞや…只須く兩頭を截斷し…善惡の外…虛心に出づべし…獨立自尊…廣義に於て一手段道德…獨立自尊…思慮分別…人物…賢人…天下の眞人…
第七章　修禪の機……一〇九
禪の弊や魔道に隨ちん…學術の弊や兩頭に逢はん…修禪の機…大疑の下に大悟あり
第八章　結論……一一七
禪の傳來…禪は文字の上に在らず…文字も亦止むを得ざる所…余が本書を著はせる所以…古人の說き方と相異せる一二の例…禪の三昧とは心の純一無雜なる狀態を云ふ…禪と身躰

目次終

禪學論

理學博士　近重眞澄著

第一章　總論

三段論法と一段論法

今日吾人々類の使用致ます思索法中で最も精確なる者は三段論法で之を措ては他に論法の憑る可き者が無いとは一般に確信せられて居る所であります。然るに三段論法の行はれますのは相對界に於てゞ有りまして先つ二者の關係を定めて此と比例を失はない樣に第三者の關係を定め樣と云ふのです。今日普通一般は行はれて居る知識は凡て皆此の二本立ちの知識で有りますが茲に此等の通俗の上に立て一本立の一段論法と云ふ者が有ます。三段論法は遂

に一段論法たる事を得ませぬが。一段論法は何時でも三段論法に歸る事が出來まして。つまり。宇宙を人間以上に看察しながら。又自由自在に人間界に出入し。毫末も之と違背する所がない。實に奇絶快絶の論法で有ます。今日世人が宇宙を詮鑿するに。唯專ら三段論法にのみ即して。一段論法の有るを知らないのは。必竟其本を忘れて末を追ふの過に陷つて居ますので。其見識の居かぬ樣子は宛も平面國の人民が立體國に遊んで。到る處只だ平面以下を見るのみで。遂に其本體を知了することの出來ないと同樣で有つて。百千の著述も萬億の言辭も。全く宇宙の眞相を究はめることは出來ず。空く徒勞に歸するのを憐むので有ます。此一段論法は。如何にも道理以外思慮以外で有りまして。人間社界には一日も成立するを許されざる者の樣に。考へられるかなれども。

不立文字教外別傳の傳

不思儀にも此論法を徹頭徹尾推し通して。無理會の中に一貫せる條理を見得せしむる者が有るです。是即ち不立文字教外別傳の禪で有りまして。宇宙の研究法中之に優つた者を他に見出すことは決して出來ないので有ます。顧ふに一段論法は。從來多少一般の宗敎家に依りても使用せられた處で有つて。南無阿彌陀佛とかアーメンとか云ふ題目は。即ち皆是なので有ます。然るに如是通例の宗敎に於きましては。先づ行ける處までは何處までも。三段論法を用ひて。全く敎法を人間化して置きながら。到底それでは達し得られない宇宙の眞相と云ふ段になりますれば。忽ち其處を題目に托して一段論法に致ます。從て敎理上前後貫通せぬ處を生じまして。現今の如く人文日に進み論理愈精密なるの場合に臨みましては。到底斷見妄信の譏を受くるを免れないで

す。必竟簡單に云へば。始めは三段論法で以て信仰を起させながら。何時か知らず論理以外に持つて行かれるのを嫌ふので有ます。然るに禪では自ら敎外別傳と稱ふる位で。最初から少しも此二本立ちの智識を用ひませずして。而して何處までも其條理が一貫するので有ます。そこで其第一の立脚點は。三段論法を徹底破壞せしむるに在つて。實に三段論法を斥けて從來の惡智惡覺と稱へます程で。鵝の毛一本も斯の如き見解を交ゆることを忌みます。そして是から後は一段論法を操縱し。一段論法は交はつて三段論法となり。三段と一段と相須つて森羅萬象を究め盡くし。虛々實々。出ては塵俗に遊び入つては仙界に翔り。其間一貫せる條理は。如何なる智者も如何なる論客も。到底之を左右することの出來ない處が有るです。是が同じく宗敎で有りながら。禪の學

然として他宗に超絶せる所以で有ります。そこで以下先づ三段論法は末にして。到底宇宙の眞相を盡くし得ざる所以を論じまして。それから遂次禪が如何に宇宙の看察を致しますかを說述して。一段論法の非凡なるを證明いたしませう

僧問雲門。如何是一代時敎。雲門曰。對一說　碧巖集

子曰參乎。我道一以貫之。曾子曰。唯　論語

梁武帝問達磨大師。如何是聖諦第一義。磨曰。廓然無聖。　碧巖集

第二章　宗教哲學及び科學

人間が獨り此宏大無邊なる宇宙間に生れ來て。自分の現在の地位が知れない。之を知らんとして色々藻掻いたる結果が。宗教となり哲學となり科學となるので有ります。人間に安心を與ふる上から申しますれば。宗教は實に偉大なる勢力を持つて居ますが。併し此は前章に於て述べました如く。禪を除ては。常に人間並の相對的智識を基礎として教導しながら。突然開山の神靈的威嚴を弄して人の意識を抑壓致ます爲め。論理の上に矛盾を來し。其弊や之を信ずる者は知らず識らず斷見妄信に落ちて。人文の進歩に後れ。折角の安心も却て社會に害毒を流す樣に成りますし。又少しく學問を研究して理想の高尚なる者に向うては。始めから信仰の

念を起さしむることが困難で。從て安心の道たる所以を失ひます。哲學と科學とは。宗教とは多少趣を異にした處が有りまして。何處までも三段論法を推し通しますので。毫末も斷見を下すことを許しません。換言すれば。全く各自の自由討究に任かせて。相對的に宇宙の神秘を闡明するに勉めます。然るに此の如く共に相對的の智識で有つて見ますれば。二者の間に別段の相違も起らぬ樣で有りますが。事實上哲學の與ふる安心は。科學に比して遙に劣等の位置に在る者と謂はねば成りません。今若し假に哲學の所說を以て精確疑なき者と致しました處で。何人も皆哲學の開山となることは出來ませぬ。從て多くの人は。古賢先哲の遺蹤を追うて。誰の論は云々。彼の說は云々と暗記するに止まります。其結果知る所徒に多くして信ずる所少しも無く。自家の頭腦は

恰も一箇の精巧なる蓄音器となり了はるに過ぎないです。好しや自身が哲學の開山で有り。又開山同樣の信念を持つて居る塲合でも。猶ほ哲學の不十分たる評を免れない譯が有ります。それは哲學者は自分と學說と一致することを忘れるのです。宇宙は宏大無邊で中々一朝一夕に知り悉くすことの出來る者でない。それに勝手に理屈を付けて。云々と論じて見た處で。自分は依然として自分で有ります。例之ば宇宙一元說を立てゝ見ましても。心と身とは中々一つには成りませぬ。考へて見れば是非とも斯樣あるべき筈だが。どうも實際は左樣行かぬと云ふのでは。矢張まだ眞理を得ては居らぬので有りませう。況や哲學といふものは。何處までも自分勝手の議論なれば。其結果安心は愚か。如何なる懷疑の淵に沈み。如何なる厭世の嘆げきに陷るやも測られぬのであります。要するに哲學が人世に成立致しましたのは。宗教が如何にも斷見的に過ぎるのを見て其弊を補はんとしたので有りませうが。其哲學が又頗る如何はしいこと。上陳の如くで有ります。そこで科學は更に其哲學の弊を見拔いて。斷然空理空想を排斥し。徹底事實の詮鑿に取掛る樣になつたので有ります。即ち事業上人間は如何樣なる者で有らうかと云ふのです。此の問題を解決する爲めには。廣く宇宙の萬象を究はめねばなりませぬ。此事業が頗る困難である爲めに。今日の科學は未だ俄に形而上の論に進んで。宇宙の實體を論ずるの域に達しないので。必竟空想假定に依らずして。安全に之を論斷するの塲合に至らぬので有ります。從て哲學でも法律でも道德でも。行く々々は。皆是科學の一分派たる可き者で。凡て事業と密着して斯かる學問が成立す

る時期が來るに相違ないです。今日人智の進歩未だ此域に達せざるに當りて。猥りに宇宙を論じ造化を說くのは到底空談たるを免れないです。空談を離れた哲學は即ち科學です。唯科學が歩武堅確にして敢て一歩も苟もせず。何分捗々しく宇宙の樣子が分らないと云ふ處から。如何にも人間が心元なく思うて。勝手に行き過ぎた結果が。今日までの哲學で。それも追々近世に爲つては。科學を出來るだけ利用する樣に成つたのです。要するに事實と一致せぬといふことが。哲學の安心上一大缺點で。そして此缺點は寧ろ哲學の爲めには致命傷と申す可き程の者で有ります。在昔希臘の哲學の中には。地水火風を宇宙の基礎にして種々の說明を與へ。就中原子說の如きは。十九世紀の始めに及んで科學者に利用せられて。遂に今日の化學を創開するに至つた位の者ですが。彼此同樣宇宙の現象に立脚點を置きながら。今日の科學は人生に無限の便宜幸福を與へつゝあるにも拘はらず。希臘哲學の遂に衰退するの已むを得ざる譯は。他ではありません。つまり宇宙間の事實と云ふ事實に對して。十分の注意を拂はざりし爲で有ります。斯の如くして科學は今日でこそ殆ど形而下にのみ齷齪して居る傾向はあれ。凌天の氣は固より一寸の稚松にも存しまして。科學の範圍は追々人間一切の學術に迄擴充せらるべきで有りませう。現に今日でも此傾向は確に見えて居ります。近頃獨乙の有名なる化學者オストワルド氏の如き。其科學的見地から立論した自然哲學の著述が有りましたし。英國の化學者クルックス氏はラヂウム元素發見の事實に憑據し物質に關する素論を益擴張せんと試みつゝあるのを見ても明らかで有ります。

宇宙存在の認定

以上論述する所に依りますれば。人間の智識即ち三段論法を用ふる安心法中。最も完全なる形式を備へた者は科學であると云ふことに歸着致ます故。是から科學が如何に宇宙を說明するか。其所謂事實とは如何にして定める者かと云ふことに就て。略說致しませう。

吾人々類は何の理由と云ふことを知らず。自己即ち我心に對して。此宇宙が獨立の存在を持つて居ると云ふことを認めます。此認定は實に只だ長い間の習氣が薰染して成立つた者で。決して或る正當なる理由から來たのでは有りませぬ。何ぜかと申しますれば。元來吾人をして最初に宇宙ありと看察せしむるものは五感です。其五感が各勝手に五通りの看察をして。それを自己が綜合致しまして。始て一の物體が認識せられるのです。それも決して直下に看察するのでは無い。五感が曾て知覺した他物と其物との差を認めて。それを言つて居るので。全く其物自身を指しては居ないのです。極近い話が。眞白な紙に同し位の白さで文字を書いても讀めないでせう。讀めると云ふのは。只々差が認められると云ふ事で有ります。如斯して吾人が日常物と見做して居る者は。實は矢張自己の心の活動で。外に尙ほ其樣な活動を起させる者があるか否やは知れませぬ。已に物がなければ。心と云ふのも何にやら分りますまい。是も必竟外の物に對して自己と認め得たからなので有る故です。要するに物あれば我あり。我なければ物なし。物乎。我乎。抑も物我相存乎遂に是れ未了の問題なるにも拘らず。直に宇宙の存在を認定し來りますのは。全く無意味の斷案たるに過ぎざることが能く知れます。併しながら理屈は且く措ひて。吾人は現に今茲に

科學上の事實

在り。宇宙も亦た我が眼前に横つて長へに變はる所を見ませぬ。此現實的關係は習氣の致す所。眞と僞とを問はず兎に角之を打破することが出來ませぬ其關係を何處までも基礎に取つて。見たまゝ聞た儘に言ひ現はした所を科學上の事實と申します。斯の如くして科學上の事實は。悉く相對的即ち物との差の上に成立ちますので。極々根源になる二物の關係だけは全く任意に定めることが出來ますが。已にそれが定まれば。第三者以下は皆其二つと比例を失はない樣にして見て行く必要が有ります故。尺度とか天秤とか云ふ色々の器械が出來て參ります。好し其樣な者の用ひ得られぬ場合でも。手段は矢張同し筆法を取りますので。例之ば。數學では位置を示す爲めに縱横の二軸を作り。測量では距離を知る爲めに三角測量と云ふを行ひ。推理怯てはかの三段

五感の價値

輪法と云ふものが成立ちます。此の如く三者の關係を精密に見取れば見取るだけ。事實は確かだと申すので有ります。然らば吾人が此等の關係を見取る方便即ち五感は。何れだけ信用の出來る者か。此價値に就て考へて見るに。それは實に怪しい者です。第一同じ現象でも五感の感じ具合が心の樣子に依りて著しく異ります。例之ば。暑い時に用をして居ても熱心なか不熱心なかで。いやに暑かつたり又左迄暑くも思はなかつたり致します好し斯の如く心持に惑はされない迄が。細かい差異になりますれば。到底五感では物の役にも立たないです。近頃科學上では攝氏一度の百分一又は千分一位までの事は樂に精測致ますが。此等は五感だけでは及びもつかねことで有ります。五感は一箇人の上に於ても常に斯の如く不充分で有りますが。更に自己と他人との

比較を取つて見ますと。一層その欠點が判然致ます。即ち人々によりて必ず五感の働き方が異りますので。科學上測數にかゝる實驗は。凡て皆癖差と申すものを持つて居ますし。其殊に著しい場合は五感の中或者が全く欠けて仕舞つて居ることもあるのです。色盲の如きは即ち其一例です。斯の如き譯合でありますから。科學者は正しい事實即ち相對的關係を得るが爲めに色々五感の欠點を補正する所以の手段を講じますので。第一には自己の經驗。第二には推理。第三には學術的器械の力を借りるのです。特に最後の方法が完全に發達するに從ふて。看察が愈精微に入りましたので。目に視えず手も屆かぬ處まで。今日では多くは十分に知り得ましたし。尚萬人が萬人まで皆同一の標準で比較考究するの便が有りまして。之が爲めに例の癖差も餘程省けて參る

物質及びエチルギーの二元

譯で有ります。つまり。科學の主眼は只だ出來るだけ有の儘に宇宙を見取らうと云ふだけの事で。日常諸人が見聞して居る現象より他の事は何もないので有ります。然るに科學と云ふ學問が一寸不思議な者の樣に見受られますのは必竟只是が俗人よりも一層精密なる看察を下して居るからと云ふだけなので有ります。以上陳述するが如き手段に依りまして。科學者が事實上宇宙間に存在せりと致します者が實に二あります。即ち物質とエチルギーです。今日一般の科學者は實に此二元論を執て居るのです。そして吾人は此外にまだ色々の者を知つて居るので有つて。それは即ち時間空間數量思想生命及心靈と申す樣な者でありますが。併し科學者は未だ之を物といふものゝ中には算入致しませぬ。凡て此等の物及び其他に關する議論は。已に世に熟知せ

られた處で有りますが。後章の説明上大に便宜を得ますから。煩を厭はず玆に之を説述致します。第一物質は誰でも容易に其存在に氣が付きます故。古來から早く知られて居ります。其特性の中で著しいのは。廣がりを持て居る即ち或空間を塡充して居ると云ふ事でありまして。忽ち能く人の五感を刺擊し其注意を惹起すので有ります。然るにエヂルギーは全然之とは異つた者で。其れは例の廣がりの無い事だけに依ても已に十分に認められます。エヂルギーは斯の如くして元來が無形で。實は只其作用を以て現はれて參ります者で。其定義を仕事を爲し得る能と申します。何分形が無くてそして常に物質に據て其能を盡くします處から。往々物質の如く誤解せられて居た時も有りましたが。今日では。全く物質對等に獨立した一種の物となつて居ます。此智識

は實に當代科學の精華で有りまして。此を利用する爲に今日吾人が享有する福利の數は。頗る大なる者で有ります。處で物質とエヂルギーとは其の如く全然別な者となつて居るにも拘はらず。不思議にも亦大に相類した處が有るです。即ち共に不生不滅にして各其總額に於て定まりある一體と申す事であります。一體と申しますけれども。其實今日ではエヂルギーにも色々の種類があり。物質にも單體化合物と種々樣々の區別があるので。果して左樣であるとは何うして云ふかと尋ぬるに。先づ物質をエヂルギーにしエヂルギーを物質とすることは今日の科學者の未だ成し能はずとする處で。此二つは疑もなく別箇の者としても好いのですが。各種のエヂルギー間又は各種の物質間に於て。銘々內輪の變遷は自由に行はれるので有りまして。例えばエヂル

ギーで申さば。電氣が光になり熱になり其熱が又運動となり音となるの類で。要するに甲が失はれねば乙は出來ず。乙を用ひて丙が現はれると申しますので。全體に於ては毫も增減がないのみならず元と々々何の形も一體の者で有ることが知れるので有ります。物質で申しませうならば。全元素の集散離合實に奇妙不思議と申すべき位で。或は甲の一團となり。或は乙の一群と化し。而かも其間全體として毫も增減する處なく。能く不生不滅の本性を現はすので有りますが只其一元素と他元素との間の變化が今日では未だ行はれずして。總數殆ど八十種に及び。何分物質一體と云ふ處には少し屆き兼ねる譯で有りますが。此とても到底見込のないことでは有りません。元來エチルギー同士內輪に交互の變遷ある所以は。必竟エチルギーの不平均に基くと申しますので。其結果は凡て物質の上に現はれ。今日宇宙間で時々刻々に行はれて居ります活動變化は。皆各種エチルギーが一瞬も早く平均して。本來の一體に歸して仕舞はふとする傾向に外ならぬので有ります。そこで誠に面白いことは物質の一起一仆が已にエチルギーの作用であることは固よりの事。甲の物體と乙の物體との間に性質の差があると申しますも。亦各自其中に包有せるエチルギーの多少に基くと云はねばなりませぬ。何となれば差あるは即ち變化ある所以で。變化は即ちエチルギーの平均せんとする結果であるからで有ります。其筆法で行けば。八十種內外の元素と云ふ者も亦エチルギーの平均と共に遂には一體に歸して仕舞ふであらうと思はれます。是は曾てクルックス氏の元素進化論に於て唱導した處で。更に此頃のエレクトロン說

宇宙寂滅の期に到れば物心一如に歸し遂に亦知るべからず

の基礎になつて居ます。何は兎もあれ茲に面白き事が有ります。即ち以上陳述する所によりて明なる如く。物も其平を得ざる前こそ鳴れ。已に一たび平を得た曉には。忽ち宇宙の寂滅期に到着いたしますので。滿目荒涼絶えて變化活動の認む可き者を見ず。從て吾人は其際何を以てか呼て物質となしエネルギーと致しませう。前にも已に屢説明せし如く吾人の智識は元と々々相對的でありまして。只目前認め得られる差別變化の上に成立つたので有りますから。其變化の已に絶え果てたる場合。智識と共に。エネルギーも物質も共に皆無に歸して仕舞はねばなりませぬ。科學上一旦物在りと斷定致しましたので。それを無とする譯には行かないのですが。併しどうも此寂滅の場合に至て。相對上有るといふことも到底言ひ得べからざる處で有ります。已に物なし

物か心か心か物か

とすれば。何に依てか心有りと知らんやで。物心皆空の場が現前して參ります。つまり有るものが無く。無いものが有るので。此事は。固より哲理でもなく。空想でもなく。宇宙が寂滅いたします曉には。目前必ず事實として我れ人共に實證すべき處のもので有りますが。其寂滅の日は果して何時參りませうか。今日より申せは。勿論未來に屬する想像説たるを免れないので事實上尚ほ矢張物も存し心も在ると認めねば成りませぬ。併し前にも申しました通り。科學上心靈には容看的存在のあるものとは致しませんので。是はつまり物ありて後生ずる一種微妙なる活動の狀態で。其物に對する關係は恰も影の形を視るが如きものならんと推定いたします。從て今日の科學者は。多くは其注意を。化合物と心靈とか。原形質と生命とか申す樣な問題に向ふて拂ふのであり

ます。顧ふに物が心乎。心が物乎。事實は物心相存にして。之を例の寂滅以前に決定しやうと致しますので。至難の問題たるは言ふ迄もなく。今日幾多の科學者中。未だ之に對する確說を得たものとては只の一人もありませぬ。左りながら。物を心なりと稱へて。遂に物を空する能はざる一派の哲學者に對し。心を物なりとして。日夜其の實證に向ふて研究するを怠らざる科學者の辛勞は復大に多とすべきものありと申すべきでせう。そこで二元論は先づこれで措きまして。二元以外のもので數とか思想とか申すものは。心靈の問題と共に物か否やは直に解決せらるゝ處で。別に論述致します必要も有りませんが。彼の時間と空間とに就て少しく說明致し度事がありますが。今それ物質は空間を塡充するもので。物質が認めらるゝ間は。空間といふ考は必ず着て廻はります。又物質が在ると申しますれば。それが他の物と一緒に在つたとか。他の物が去つた跡に現はれたとか云ふ考が出づるので。是即ち時間の問題で有ります。斯くの如くして。エチルギー尙存して物質に變化活動の起ります間は。時間空間と云ふ考は到底取れないので有りますが。是亦た例の寂滅の折になれば。矢張忽ち物質と共に有無の間に歸して仕舞ふ可きて有りまして。何人てもこれは容易に想像し得る處てあります。つまり今日吾人が時間とか空間とか云ふことを覺知し得ますのは。全く物質に變化活動あるが故でして。其以外獨立に此等の二を認知することは出來ませぬ。其故如何と考へますに。かの物質やエチルギーの認められなくなりますのは。將來遂にその寂滅に歸した後に在るのですが。時間と空間とに至ては。其實現在已に寂滅の有樣に在り

時間及空間は現在已に寂滅の狀態に在り

とも申すべき爲で。時間其者の中の變化。空間其者の中の變化と云のは。今日少しも行はれて居りません。吾人が測定して居る時刻と申しますのは。實は物質の運動を見て居るので。空間と云ふは物質の大さなので有ります。斯の如く物質とエヂルギーとに關係なく時間空間を知ると云ふことは。到底出來得べからざることで。從て古來此二者に對して。完全なる定義を下し得た人とては一人もなく。何うしても是は直覺に因るより外に知るべき術はないと成つて居ります。然れども茲に可笑しひ事は。變化以外差別以上に於ては。決して獨り時間と空間と計りが直覺するを要するものでは無くして。物質も亦た然り。エヂルギーも亦た然りで。其間別に何等の相違も無ひでは有りませんか

以上說話。種々餘論に亘り且つ提起し來れる諸問は。何れも皆難問で科學上萬事已に休罷せる寂滅期に至らざれば解決出來ざる處で。即今只能く之を解き得るものは實にかの禪で有るのですが。それは且く措き。兎も角科學的研究法の如何なるものであるかと申すことは。大略會得せられたて有らうと思ふので有ります

生滅々已。寂滅爲樂。
荷葉圓々々似鏡。菱角尖々々似錐。
風吹柳絮毛毬走。雨撲梨芝蛺蝶飛

大慧

第三章　科學の價値

科學者の戒心

上章縷述する所によりて明なるが如く。科學は何處までも見る儘聞く儘を根據に取ります故。未だ見ず未だ聞かざる事項は。如何ほど理由が具はつて居ても。直に之を事實とは致しませぬ。或は假定と稱へ或は一說と申します。之を事實と致しますのは。現實に五感でそれを認め得てから後の事でありますが。此用心有るが爲めに。一般哲學者や宗教家の樣に容易に斷案に走らない。從て一度事實と定まりました事は。故なくして猥に誤て有つたと云はれることが無く。所謂歩武堅確にして屢跡戻りをすることが無いのです。哲學論の如きは。根本の點までも甲是乙非何にが何やら眞僞の程の判然せぬと云ふ樣なことも有りますが。科學にはそれは有りませぬ。最も或特種の問題に對しては。論難紛々たることも有るですが。要するにそれは未だ事實を得ない點があるのだらうと見做ます故。更に科學の累をしません。而して哲學家に在て常に疑はざるを得ない自己の學說を確信せるや否やの問題は。科學者には殆ど無用であります。何ぜかなれば科學上說を立つる者は。皆自ら苦心慘怛として實地に試驗し。道理上からも經驗上からも器械上からも。有らん限りの精力を費して調べ上げますから。苟も自信の無ひことは公言致しませぬ。之を聽く者の方でも拱手無爲にしては居ない。一々自己の經驗と思索力に照し。疑はしひと思ふても實地に試驗し。面白と思ふても繰返してやつて見ます。米國のレムゼン教授が曾て演說せられた詞の中に。次の樣な語があります。即ち古人の研究法は先づ坐して而して靜

思するのですが。今人は先づ立つて而して動作するのであると謂ふのです。實に能く盡くした辞です。是の如くして他人の說も亦自家の胸臆中から出たのと同樣な者になりますから。一度信じた事は中々堅固で有ります。是必竟科學的研究法が飽くまでも事實を重んずるの結果でありまして。畑水錬。口角力とは全く其撰を異にする者と言はねばなりませぬ。夫れ然り。科學者の一度信じた事は如何にも大丈夫ですが。其大丈夫ならんことを心懸くるだけ。それだけ信じて居る材料が少ないのです。宇宙間で已に說明の付た事と未だ付かざる事とを比較して見るに前者は尙實に後者の若干分にも當らないのです。此は實に科學の進步尙ほ未だ頂點に達せざる今日に在て。到底避くべからざる缺點であります。翻て又考へれば。無理と此缺點を隱さんが爲めに。

科學者の安心

矢鱈に空想臆斷を輸入いたしますよりは。自然の進步を待つて居る方が寧ろ末賴もしい心地が致します。殊に又科學者の智識が如何にも少いと申しましたが。是は宇宙の宏大に對して申しましたことで。決して一般世人より少いのでは無ひので有ります。彼の信念の件はない曖昧摸稜たる智識の如きは。固より有つても無きが如くで。何の役にも立つ者では無ひのです。況や又今日科學者の執つて居ます宇宙研究法は。其性質に於て實に完全に近い良法でありまして。之を應用せば。將來益宇宙の眞理を開發すべき能力あることを信じます故。凡ての科學者は。皆大に安心して次の通り言つて居るのです。曰く。秘密の鍵は已に吾等の手中に在りと。

以上陳べ來りし如く。科學者は又科學者だけに自分相應の

三段論法は果して能く宇宙の開發を完ふすべきか

抱負を持つて居ります。併しながら更に冷靜に今日の科學の價値を考へて見ますれば。又大に議すべき點が有るのて有ります。將來必ず全宇宙を開發し得べしとの抱負は。實に壯烈にして意氣愛すべき者ありて有りますが今日から云へば。是尚ほ希望たるに過ぎない。三段論法のみて果して能く此大望を果し得べきや否やは問題て有ります。三段論法は前にも屢述べました如く。相對界て行はれる論法て。その相對的智識は決して眞の事物を示して居ない。已に物在りと斷定しながら眞の事物は捨て問はず。只他との相違の點計りを見て。それて宇宙の眞相が知れ盡せませうか。固より相違の點を知るのも亦たかの眞相を知るの一方便て有りまして。之を知らねば活動は出來ませぬ。相違の點を知つたればこそ。今日の科學が人生に無量の福利を與ふることが

相對的智識の欠點

出來たれ。未だ福利を以て直に是眞相と申す譯には參りませぬ。それとても若し吾人が只相對的智識を持つて居るだけて。此の宇宙間に於ける萬事が凡て滿足に理會せらるゝならば。何にも苦んて差別以外に眞相を探求する必要も無ひのてすが。吾人はどうも此種の智識に向ふて每々不足を感ずるを免れないので有ります。第一。吾人は只其差別を知つて居るだけて。大抵の事は濟ましてゆくとしましても。時あつて忽ち其眞相に衝突することがあるので。斯かる場合には何時も只茫然として措を失する計りてすが。其際幾ら日頃の不注意を悔んだとて。もう取還へしの付くものては有りません。例之ば茲に一點の火あり。人ありて急に之を輪狀に回轉いたしますれば。其火は最早どうしても一點の火とは受取れないて。恰もそこに一輪の火圈が現存する樣に

思はれるのです。相對上始めはそんな者では無かつたのに。動き出すと斯く見えますから。世間の學者は之を目の不完全に歸して居ますが。併し考へて見ますに。夫れは間違つた話なので。必竟一點の火と申しますのは。火の塡充せる面積の小なることをいふのです。それは只火の動かぬ時に在て然るのです。火が一度非常の速度で動き出してからは。實際其軌道の各部に於て。或る瞬間毎に火が存在しますので。つまり火の面積が廣まつたのと同樣であります。是は分子原子の支離滅裂なる集合でも。それが目に見えねば。矢張一個の固態とか液態とか名づけらるゝのと其關係を一にする譯で。動いて居る火と靜なる火とを。實際目が見分くる如く違つたものでないと云ふのは却て無理であるといふ批評を免れますまい。相對的の上からは何處までも。違つて居るといふ方が本當なのですが。併し同し火が時あつて小に。時あつて大に見えると申しますのも。隨分可笑しひ話で。小さい火と思ひ込んだる人間には。他の場合が目の見損じと思はれるのも。亦多少恕すべき處ありですが。斯の如き不始末は。必竟相對的智識が只影を追ふて眞を認むる能はざるの結果に過ぎませぬ。それで若し始から之を一點の火などゝ見ないで。直に是火と見て置きましたならば。一點の火は是一面の火で。我目の向ふ處一として火ならざるはない。從てそれが動いて居やうが動いて居まいが形の上で或は輪になつたり點になつたりと申す樣な可笑しな事が。起らう筈がないのであります。次に又先年青森で起りました有名なる雪中行軍の遭難事件の如きは。矢張此の適例になりますので。平素の智識が皆相對的に成立つて居りますために。忽ち

四面皆雪滿目一白の別天地に立つて。數百の人間が皆其智識といふ智識の用ひ處を失ふて仕舞ふたので有ります。吾人が日頃白いと思ふて居ますのは。黑ろいとか赤いとか言ふことに對して爾か思ふので。何時も白いものを直に是白いとは見て居ないのです。若し平生之を左樣に見て置きましたならば。何にも比較の取れない天地に出ましたからとて。俄に我を失ふて其爲す所以を忘れる樣な事はない筈です。然かも其常に斯くなります譯は。決して其人の罪ではないので。是非ともこれを相對的智識の缺點に歸せねばならぬと思ひます。第二に又。相對的智識の恃むに足らざることが。其相對的であると云ふ上に於て存します。何ぜかと申せば。元と々々相對的のことでありますから。其比較の相棒が異りますれば。其結果即ち事物に關する吾人の智識は。色々樣々に變はつて行かねばなりませぬ。恰も數學で兩軸の位置を動かして。それてXやYの價が狂つて來ますのと同一であります。又其相棒が異らぬまでも。其交互の間を見較べ方の精粗深淺によりても。智識の上に根本的改革を引き起し得べきのでありますが。今相棒の替はる爲めに從來の智識の上に及ぼす影響に就ての例を擧げて見ますれば。先づ極手近い話で。楠公湊川の討死でも或は忠と論ぜられ或は不忠と論ぜられます。科學上の事實の中に就ても。元素の原子量の如きは特に其著名なる場合でありまして。是は現在已に知られて居る化合物だけから見てゆけば。大略斯の如き價格のものとなりますが。併し他日どうして新規なる化合物の發見されぬとも限りませず。其際都合上現在の原子量を或は二分し或は三分するの必要が起るやも知れませず。

現に斯かる實例も已に屢ありました處で。今日單に原子量と人の呼て居ります名前も。學術上眞正の名稱は。最大原子量と申すのであつて。何時何の樣なる變更を要する事があつても。直に之に應ずるだけの覺悟を示して居るのです。又前章に物心の關係や萬法歸一の問題は寂滅期に至れば自然と氷解すべきものであると申して置きましたが。彼れも果して寂滅期なるものが有るのやら無いのやら。例の相棒次第事實は何う變はるやら。實際は尙ほ疑問に在ると申して然るべきで有ります。次に又。見較らべ方によりて智識の異る例證は。殆ど擧示する迄もなく。日常の萬事が皆それなので。今日の科學上の智識と古人の宇宙に對する看念との差異も全く之に過ぎざるので。彼の海の水が鹹味を帶びて河の水は淡ひといふことも。昔は只それだけの事として居ましたが。其海の中の鹽分が實は河の中から時々刻々持ち運はれつゝあると申すのには驚かざるを得ないでせう。空氣の主成分も百年この方只窒素及酸素の二元素であるとなつて居ましたが。近年意外にも。其空氣の中に尙ほ色々奇妙なる元素が含有せられて居るといふことが知れて參りましたし。又光の中でも目に感じないものは無ひ樣に極めて居ましたが。それも輓今X放散線の樣な不思議なものが見付けられて參りました。總じてこの相對的關係は何處までも彈性的で有りまして。左から推され右から推されて其度毎に形が變つて行くのです。從來吾人が見なれ聞なれて居る智識でも。之を萬古不易の者の樣に思つたら大變で。何時何の樣に推し變はる事があるやら知れませぬ。殊に吾人は五感が一般人間の通性でありますから。之を元にして

相對的智識は只一時的眞理なり

種々の看察をやつて居るのですが。それとても已に多少の鋭鈍があつて。同じ人間仲間でも見聞する上に幾分かの相違を認めますのに。況や五感以上六感も七感もある樣な怪物が居ましたならば。其看察する所の宇宙は。決して今日吾々が普通に見受けて居る樣なものでは有りますまい。如何に大なる球體でも。點體から看察すれば。亦唯一箇の點體としか見えませむ。そして其何うもならぬことには。是が點體の上から云へば決して誤のない事實なので。見る眼が狹ければ狹ひだけに。眞相の一面しか知れないといふことは。實に已むを得ざる話であります。之れを要するに。相對的智識はどうしても片輪の智識で。先づ其常に轉變極まりなき處から見て行きましても。假令へば如何程それが精密に出來て居るにせよ。今日の處到底一時的眞理たるを免れない。他日それが誤てあつたと反證せらるゝまでの眞理で。何時までも條件付てす。そこでそれが條件以外に徹底誤のないものであると言ふ事に歸しますのは。目下科學者が執れも皆希望しつゝある如く。全宇宙を悉く調べ上げて。最早他に何等已成の事實を動かすべき者もないと云ふことが知れる時まで待つのであります。此の如くして出來上りたる智識は。實に永久的でありまして。蓋し科學的智識の達し得る極點と申すべきです。處で宇宙を調べ上げると云ふことは。果して出來ることか何うかそれも知れず。況や其中に彼の寂滅期なるものが來ると假定致しますれば。所謂永久的智識なるものも。元是相對的關係を言ひ現はしたゞけの事で。從て又忽ち其妙用を失ふて仕舞はねばなりませぬ。併し其際事實上物は何うなるでせう。此處が實に大切なる問題で。即

宇宙間の研究は體用二途に於てすべし

ち他物との比較差別は扱て置ひて。本來本眞の實體は何者ぞといふことになるのです。なれども此實體に關する點は本來科學的智識の企て及ばざる處で。今日でも現に屢其不足に困難することあるは。前にも已に例示しました通です。そこで考へて見ますに。宇宙間の事物は凡て體用二途に出てまして。此二を併せ見取つて始めてそれに關する眞正の智識が得らるゝので。用あつて體なければ。體に出合ふた時に窮し。體あつて用なければ交互の關係暗くして日常の活動が鈍ります。而してその用に關した部分は科學者が已の本業として時々刻々研究致ますので。愈益永久的眞理に近ひて參りますが。體に關する智識は他に之を知るの道を求めなければなりませぬ。世に哲學といふものありて專ら此方を心掛けて居る樣ですが。惜ひ哉。是は前にも申述べました如く。體を求むるにも亦用を求むると同一の手段に出て居りますので。到底其目的は達し得られますまい。蓋し其能く斯の如き智識を供給し得て諦當なるものは。我が禪門を除ひては他に復た有り得べからざる處であります

窮諸玄辨若一毫置於大虛。竭世樞機。
倡一滴投於巨壑。　　德山

鼠入錢筒伎已窮。十年蹤跡眼頭空。　　虛堂

如何にして事實的本體を得べき歟

第四章　禪の境涯

前章已に縷述いたしました通り。唯だ哲理上から宇宙を討究して見ても。事實が之に伴はねば何の役にも立ちません。併しながら科學上の事實と申しますのは。元と々々相對的に出來た事實であつて。遂に物の本體に達することが出來ませぬ。そこで奈何にせば事實上の本體が得られませうか。是は他に道とては有りません。只だ一物を比較差別に亘らずして直下に見て取るだけのことで。即ち禪の境涯を得るにあります。人若し一たび此境涯を手に入るゝときは。草なり木なり山なり河なり。乃至は善といひ惡といひ。有形無形有りとあらゆる現象が。事實上皆一本立の智識として現出して參ります。それ故に禪では。宇宙の本體を何んでも皆一つ一つの物の上で見屆けて行きますので。決して哲學者の樣に。知るとも出來ない宇宙の大さを。無限大だとか何だとか色々に想像して掛つて。其上で本體を畫き出す樣な煩雜なものでは有りません。相對上では科學的智識が眞の事實に合し絶對上では禪の境涯が正しく事實であるのであります。而して面白いことには。何方でも事實は何處までも事實なので。之を得るのに理屈も講釋も少しも入つたものではなく。已にそこに到れば。啞でも聾でも亦均しく冷暖自知するの妙があるです。そこで彼の直下に見て取るといふことが一般の人間には出來ない仕事で。從て何時迄も二本立の智識で困まつて居る譯なのです。一本立の一段論法と申しました處で。此一本立の一は決して一二三の一では有りません。斯の如き一ならば。矢張已に相對的に落ちて居ます

兩頭俱截斷。一劍倚天寒

ので。相對以外直下に見て取るのには如何にせば宜しひてせうか。是からそれを述べて見ませう。語に曰く。兩頭俱截斷。一劍倚天寒。と是實に禪の境涯と之を得る所以の方法を說き盡くした者であります。凡て生に對する死。是に對する非。二に對する一。此等の兩頭を截斷し盡くして。即座に本體を見。寂滅の境に入るのが禪で。其入つた處は只是れ一劍倚天寒です。其一劍倚天の境涯は。即ち兩頭俱截斷した處にあるので。自ら能く其塲を踏み來つた者でなければ會得は出來ませぬ。若し之を詞の上で說き現はし。意識の中に持ち來らば。それは已に相對差別の塲に落ちて居ますので。絕對では有りません。此の如くして禪では古來言句の末に亘ることを大に卑めますので。唯だ々々去つて驀直に其塲に行かねばなりませぬ。併しながら已に一たび其塲に行つた者は無理會の中に理會あつて。萬法皆掌を指すが如くなり。それより更にその境を離るれば。どの道からどう云ふ風に入り込んで大略云々の樣子であつたと云ふことの話せぬことも有りますまい。勿論是れは相對界に出た上の噂で。境涯自身で無ひ事は十分記臆せねばなりませぬ。そこで兩頭俱截斷した處は何う云ふ處か。退て之を言句の上に現はして見ますれば。茲に一本の扇子あり煽ぐが故に扇子にあらず。骨ある故に扇子にあらず。扇子なるが故に扇子にあらず。直に是扇子なのです。人若し一たび斯境涯に入れば。實に是從來紛々たる差別相對の雜念。皆忽ち其影を潛めて他又認むべきなしで。中之を容るゝの室もなく。之を握れる人もなく。上には覆へる天なく。下には載するの地なし。此時扇子はどうせう。煽ぐと申しても何を煽ぎます。骨ありと申しても何が

無差別平等即ち體と無平等差別即ち用

骨てせう。實に是皆無です。此を無差別平等の塲と申します。是が即ち事物の本體で。獨り扇子の上と云はず物といふ物。心といふ心。皆同じ境涯を示します。それ故につまり。人でも馬でも。草木でも國土でも。二でも三でも。生でも死でも。語でも默でも。動でも靜でも。乃至は悲看樂看。貧富貴賤。凡て皆同じ事になるので。人とは何。馬とは何。生とは何。死とは何。其間更に寸毫の區別を認めません。物心一如も實に此處に至つて知られるので有ります。然れども只斯の如く一切萬法皆空と稱へますことは。必竟僅に其體を見て未だ其用に至らざる姿で。決して絶對的知識の全面ではありません。之れを斷無の見と申して卑めますので。例之ば人は人にして皆無の中にも猶活動し得る處が存し。馬は馬にして同斷馬の持前といふがあります。つまり人は馬に非ず。扇子は笏に非ず。

無相の相は禪の眞境なり

善は惡と異にして。生は死と異なれり。同じく無の姿を爲しながら。其中に又歴然として違つた處が存するのであります。それならばそれで萬法一切全然別なものかと云ふになりますが。是では復た常有の見といふに陷りまして。前に申す無の境涯が欠けて參ります。事實は無にして有。有にして無。體用兼備へて無相の相。遂に端倪すべからざる處に存します。此が即ち一劍倚天の境涯でありまして。實に絶對の眞面目と致すので有ります。人若し常に此境涯に居なば。其一擧手一投足も亦直に是絶對の上に歸しますので。凡て眼前に現はれ來る各般の現象をして。分厘違はず忽ち之が眞面目を露出せしめますのです。此等の機用は恰も之を盤上に珠の轉するに譬へることが出來ます。珠はどう轉がつても決して顚覆することは有りません。何時でも其中心を得て

居るので。特に此例の適切なることは。珠の平面に觸接いたしますのは必ず一點でありまして。觸るれば即ち立つ。其作用の絶對一本立の智識に酷似する所以が能く想像せられます。語にも立處皆眞。隨處爲主。と申しますが。あれは實に此處の趣を云ふので有ります。夫れ已に無と出づれば萬法平等。有と出つれば千差萬落。有無俱に存すれば竟に奈何。有無俱に去れば又た竟に奈何。絶對の上から云ひますれば。此等の場合は皆何んでもないことでありますが。世人は兎角に其有と出た處ばかりを見て居ます爲め。變通自在の妙を欠き。常有の絆徒に自ら苦しむの陋態を演出するので有ります。今それ一たび此の繩縛の外に出て、平等無差別絶無の境涯に進み。それから再び本に還つて。山は是山。水は是水と申す處に至りますれば。從前無上の厄介物たりし常有の絆が。只だ其儘に絶對の位に登りて。我を助くるの杖とも柱ともなるのであります。夫故に禪では唯もう此境涯を得るのを第一の目的といたしまして。此他には少しも六ヶ敷き事はありません。併しながら茲に大に注意すべきことは。苟も此の如き境涯を得んといふ樣な念慮や。又は自ら此の如き境涯に居ると申す樣な考が殘つて居ましては。是は決して其場の絶對を得て居るのではありません。眞の絶對ならば前からの心構へや。或は即今何をして居るなどゝいふ考の有り得べき筈はなく。只だもう其場々々の切回はしにあるのです。つまり禪の眞境は胸中何の蓄ふる所なきによりて來り。其蓄ふる所なきが即ちその自由自在の妙用を現出いたさしめます所以なので。之を無念の念と申します。已に無念の念にしてそこに無相の相を生じ。無念無相相待つて宇

無相の相は無念の念にして始めて

得べし

宙の萬化に應じて。遂に捍格する所なきを得るのであります。從て精といひ粗と云ひ大といひ小と云ひ。眞と云ひ僞といひ。善と云ひ惡と云ひ。絶對と云ひ相對と云ひ。能く其來る所に應じて窮まらず。把定すれば一毫頭上に集まり。放行すれば億千萬別。仰げば彌高く。鑽れば彌堅し。之を嚼て前に在るかとすれば。忽焉として後に在り。或時は人を奪ふて境を奪はず。或時は境を奪ふて人を奪はず。或時は人境俱に奪ひ。或時は又人境俱に奪はずと申します。然れば人あり。此境涯に至りて始て說て唯心となすも亦可ならん。說て唯物となすも亦可ならん。說て心物二元となし。說て心物皆空となすも亦固より可ならん。加ふるに凡て是等の事項は。皆自ら事實の上に實現して明確に能く踏査し來るのでありまして。決して彼の一を知つて未だ二を知らず。一すら猶ほ信疑の

中に居るが如き。窮屈にして且つ淺薄なる境涯では有りません。顧ふに今日世俗の論凡て皆一方に偏して。甲是乙非。紛々として其極まる所なく。是を取れば非が立たず。非を取れば是が立たず。忽ち事實の上に於て窮する所あるは當然の次第で。禪の宏大無邊なる境涯とは實に雲泥の差が有るので。一言以て之を盡さば。是も亦禪。非も亦禪。唯だ禪は是非共に存し。又共に空しきものであると申すべきで有ります。そこて上來陳述いたしました處は。必竟禪の境涯を摸寫いしましたゞけの事でありまして。決して境涯其者ではない。境涯其者は好しや能く摸寫し得たるにもせよ。得ざるにもせよ。別に歷然として存する處が有つて。只能く人の冷暖自知するを要するばかりです。然れども何分深く從來の習氣が薫染致し居ります爲め。冷に接して更に冷を知らず。暖に

以心傳心の脩行

遭ふて遂に暖を覺えざるの失が有りますから。古來禪には師家なるものありて。已むを得ずして强て術を設け。漸次に舊を去つて新に就くの道を講究せしめますので。之を以心傳心の脩行と申します。即ち專ら古人の行履を便りに。手を更へ品を代へて。實地を踏査いたしますので。それで絶對の全躰が遂次に露出して參ります。斯の道程に就ては。一に箇人の自由に任かせまして。所謂點滴も施すことなく。他から何事も敎へ込むことはせず。純然たる自由討究なので有ります。而かも遂に何人も落付く先きが一つだと申すこと故。それだけでも禪が事實であると云ふことを想像するに足るでせう。併し玆に一の疑は。科學者は哲學者の靜坐默思を嘲つて。何處までも起つて事實の詮鑿に從事すべきものと致しますのに。禪客は却て朝から晩まで只だ打坐する計りで。それで。何うして萬法を事實的に究め盡くすと云ふことが出來るだらうかと云ふ事ですが。併し禪では無論動靜一如の事なれば。其打坐した處は宛も科學者が立つて居る處と同じ事になるのです。そして又禪客は必ずしも常に打坐するを要する者ではないので。動中の工夫は却て靜中に優ること幾千萬倍なりとは。古人より已に稱道せられて居る所であります。斯の如くして寢ても覺めても。起ても居ても。一衣一帶。一呼一吸。皆是禪家修行中の者となります故。彼の藥を採りて山中に去り道を求めて蓬萊に遊ぶが如き迂遠なるものでは有りません。それ然り。何事でも皆實參實究。脚實地を踏んで一段論法を操縱し。一段論法は更に化して三段論法となり一段と三段と相待つて能く宇宙の眞相を活現いたします。此等の點から考へますれば。禪の修行は科學

相對の境より絶對を求めんとするの失

に比して一層宏大精確なる研究法を用ゆるものと言はねばなりませぬ。

世間でも此絶對と云ふことを申しますが。併し何れも皆比較相對の上から見た絶對で。絶對に於ける絶對では有りません。例之ば宇宙の外に絶對の主ありと說きます。併し已に宇宙に對したものならば。それは絶對では有りますまい。又物心一如を說く人が有ります。併し物に對して心のみだと說くので有るならば。是れも矢張絶對では無ひ。實に物の無ひ處では心といふ看念の起り樣が有りませぬ。佛敎の中でも禪を除ひては多くは眞如と立てゝ。之を完全無缺玲瓏玉の如き者の樣に說きます。何ぞ知らん。屎送尿も亦是れ祖師の面で。欠けた茶碗も破ぶれた着物も。皆悉く其眞如の實體なのであります。此の如く眼前に充滿せる眞如をも知ち

數學上に於ける禪機

ずして。却て遠くかけ離れた處をのみ尋ね回はりますのも。決して外では有りません。常に自ら相對に居て强て絶對を求むるの罪であります。要するに世間では絶對と云へば。直に何にか現世の外に在るものゝ樣に極めて仕舞ひますので。到底扇子一本筆一本が其儘絶對であるとは心付かないのであります。殊に甚しい場合は。絶對とは何でも無限大でなければならぬ樣に思ふことでありまして。其大と云ふのが已に小に對する詞であるといふことを忘れて仕舞ふて居る樣です。宇宙を盡くして大を知らず。微塵を究めて小を知らぬ處が。如何にも絶對の絶對たる所以なのです。そこで前にも一本立の一は。一二の一ではないと申しましたが。此事を數學の上から考へて見ると。餘程面白いことになります。通例吾々の申して居ます1とか2とかいふのは。何れも

皆

$\frac{1}{1}$・$\frac{2}{1}$・$\frac{3}{1}$・等

此の如き一種の比に過ぎないので。決して單獨に1 2 3といふものではありません。單獨の1 2 3ならば。それは直に禪の境涯に合するので。何の樣な價格を有する數學だか言ふことも語ることも出來ない筈になります。併し稍其の價格を想像するに足る關係を述べて見ませうなら。それは先づ試に$\frac{1}{1}$の分母は。絶對的零に代へて見るにあるです。即ち

$$\frac{1}{1-1}=\frac{1}{0}=8$$

是の關係は1の零に對する倍數は。∞であるといふことで有りますが。之を他の辭て言ひ現はして見ますれば。1といふ數でも。他の常數に對して比較することを止むれば。即坐に∞になると申すべきでありませう。そこで此の1 0は彼の單獨の1に對して。更に如何なる關係に於て立つやと申しますに。$\frac{1}{0}$は尙ほ矢張$\frac{1}{0}$で比較すべき相手が無くなつたと申します考が取れないので。それだけ取れゝば。それが直に單獨の1と化するのです。此の單獨の1は。彼の所謂冷暖自知するで。自ら其の境に到つて見ればそれが一番の早分りでありますが。文字の上では兎角$\frac{1}{1}$との區別が立ち兼ねますから。そこで稍近ひ$\frac{1}{0}$即ち∞の上で論を立てゝ行きませうなら。例之ば世間では大と小とは全然別なものと致しますが。誰でも知つて居ます如く。數字上或る場合に於ては

$$+8=-8,\quad 8=0.$$

斯の如き關係が成立いたします。是は平たひ詞で云へば大

正が負に等しく萬が一に等し

が小に等しく。有が無に等しひと云ふことに成りますので常數の上では到底有り得べからざる次第でありますが。數理に誤のあらふ樣もなく。絶對即ち相對的以外には。常人の夢想し得ざる境涯の有る事を想像するに足ります。況や彼の禪的境涯は。更にこの數字上の絶對以上に位するもので有りまして。正が員に等しく。陰が陽に等しく。有が無に等しく。大が小に等しく。自が他に等しく。前後左右と古今東西とに論なく。有りとあらゆる萬法一切を合せて。又共に之を一に歸せしめますのです。左れば彼の種子から芽が生へて。幹になつて。枝が伸んで。葉が茂ると申しますのは。恰も枯れてから葉が出て。枝が差して。幹となり。根となり。遂に種子に返ると申しますのと同じです。世界の開闢から。色々の歴史を經て。始て今日に立ち至つたと申しますのは。直に是れ世界

玄の又玄道ふこと莫れ只是狂言と

の末期から。死んだ人が活きて。生れて。凡ての歴史が逆まに後と返へつて。遂に世の始めに復ずるのです。併しどうも此等の事を相對差別の上から見來つた處では。到底本當とも思はれない次第でありますが。禪では何んの是式の事は。實に譯もない事で。所謂衲僧家尋常の茶飯たるに過ぎないのです。而して啻に歴史が長ひ間に逆戻りする許ではなく。其幾千萬の歳月も。此宏大無邊の乾坤も。即今此場で之を反復顚倒せしむることを得るのでありますそれで是等の言句は如何にも荒唐無稽の甚しきものゝ樣に聞かれるのでありますが。禪ではどうも事實その通りに實行いたします故。何んとも致方がないのみならず。又彼の數理上から推して見て其境涯の直ぐ傍まで行きますれば。實際正數と員數とが相等しくなる場合のあることが證明せられ得ることは。

萬は一に非す。正は負と異なれり

前項已に說明した處であります。偖又禪ではこの自他平等萬法無差別の境涯だけで止まりません。更に進んで差別向上の一路あることも前に已に陳述して置きましたが此關係も稍明瞭に數理上から想像することが出來るのです。即ち同樣に∞でも。其間種々の位階がありまして。其交互の比は實に千差萬別であります。そしてこれは能く

$$\frac{8}{18} = 0 - 8 = \text{多數}$$

斯の如き式によりて表示されるのですが。之と殆ど同樣に。單獨の甲と單獨の乙との間に。比が出來て參りますれば。それは即ち禪的境涯の正に人間界に一致した處で。一切萬法落もなく再現し來るのであります。人もし今此境涯に立ちて動作せば。東西南北指顧歷然として。寸絲亂れざるものあるを見るでせう。

蘇直に去れ

以上縷述致しました處は。禪の境涯中僅にその梗概をば噂したのに過ぎませぬ。愈究めて愈深く。愈出て〻愈奇なるが禪でありまして。中々一朝一夕の能く盡くすべきでは有りませず。殊に況やその噂も。實に詞の如く噂でありまして。誠の境涯とは沒交渉です。外から之を評すれば。千言萬語も尙ほ之を盡し難く。四十九年五千餘卷の經を說て尙ほ一字不說に了らざるを得ませぬが。若し一たび其境涯の中に入れば。如何に大なるか小なるかは知らず。兎も角即坐に之が全體を捕捉することが出來まして。千言萬語又忽ち口を衝ひて出づる樣になります。人の噂を聞ひた計りでは。つまり絕對なるものゝ見物で。從來の智識に比して更に一歩を進めた處もありません。此の處須く奮勵一番。自家の妍醜自家に知るの覺悟を極めて。蘇直に實地實境の中に進み。表と裏と。

露地と大道と。乃至は山と河と。海と陸とに論なく。自由自在に横行濶歩して。始めて得つべきてありませう

碧巖集序

分明紙上張公子。盡力高聲喚不應。

南嶽讓禪師

說似一物即不中。

中峰廣錄

針頭削鐵。蠶股劃肉。

竺源和尙

井索何如鍵索長。

なにがし

そこが凡夫てゞーあなた

第五章　禪と學術

禪は凡ての學術を包括す

前章已に科學の智は終に究極に至らず。禪にして始めて之を得つべきことを陳述して置きましたが。然らば科學と禪とは全く別物無關係の者かと云ふ論が出づるでありませう。此の論に對しては。科學は禪ではないが。禪は科學を包括すると答ふることが出來ます。禪の境涯は有無兼備の境涯にして。有と出た處は萬法一切其儘に羅列せられた有樣で。その差別の研究は。實に如何樣にでも遂行せられ得る譯であります。即今吾人の知る所を以てして。三段論法が何よりも一番精確なる研究手段であるといふとて有りますれば。則ちそれを用ひて研究しゆけば宜しひので。そこに成つては最早凡夫の科學と一點異る所もありません。唯かの凡夫は

この差別の側のみを見て動き。禪ではその差別の中にも猶本體が具備して居ることを。知つて遣つて居るのが同じくないと云ふだけの事であります。勿論この本體と申しますのも。差別を立てつゝ尚ほ其外にそんなものが在ると申すのではなく單にもう山と眺め。河と望み。家を建て。着物を仕立つる中に。自然と其本體が出來て居ることを暗んずるのでつる中に。自然と其本體が出來て居ることを暗んずるのであります。凡夫其まゝ佛なりとは。實に斯の間の消息を云ふたものであります。惠心僧都の語にも。無差別平等。不準佛法惡平等故。無平等差別。不準佛法。惡差別故とあり。隨て禪の極意極則は。唯此世界を有の儘に現出せしむると云ふ外には何も無いことが明白だと思ひます。併し是は其一度何もなく成つた處から。再び世界の相をなして現はれ來つた處なので。此立場になつて見れば。所謂かの無相の相を相として。往くも返へ

るも他所ならず。應接自在。變化縱横。丸いもの。角いもの。長いもの。短いもの。偖は人畜草木。山河大地。有りとあらゆる萬法を認め盡くして。遂に窮まる所を知らず。若し能く已に此の如くならば。其結果は則ち道德ともなるべく。法律ともなるべく。畫とも書とも。大工とも左官とも。乃至は紳士とも商人ともなるでありませう。如何に科學が新しい學問でも。矢張此結果の外に出づる筈がないです。元來禪では相對的智識のことを後得智と云ひ。又從來の惡智惡覺とも申しますので。そしてかの禪の境涯の事を稱べますには。根本智とか般若の良智とか云ふ名を以てするのです。未だ悟了せざる以前には。相對的の智は人をして徒に千々の思に惑はしむる計なので。之を斥して惡智惡覺と申しましても。實は不可はないのですが。併し一たび悟了した後は。その相對の智が其

儘に良智に化して仕舞ひますから。幾分語弊があるやも知れません。根本智と後得智といふに至ては。如何にも能く二者の關係を言ひ現はした名前でありまして。最初に一本立ち絶對の智惠ありて。然る後二本立ち相對の智惠が出來ます。勿論根本智と云ふは有も無も該ね具へて。一本立ちも二本立ちも存在した處なのですが。先づ其一本立絶對の本體が他に對して何う異るべきか。所謂絶對に於ける相對に入つて。愈云々の差ありと言ひ出されますのは。是非共第二段の働きに屬すべき次第であります。そこで眞の根本智が具はれば。後得智は自から現はれて參るべき理でありまして。根本後得と區別する譯もない樣なものですが。世間では何時も後得智のみ存して。根本智が失却されて居るのが通例となつて居るかと思はれるのです。早い話が例之ば。先づ水

根本智と後得智の關係

と直覺し火と直覺して。而して後水火の作用も出でゝ來るのでありますに。それを世間では却て唯後の作用の方にのみ注意して。水とは何。火とは何と云ふ方には全然無頓着であると申さなければなりません。左れば根本智といふのは。前陳の如く本末共に具はりたるものを稱へる詞では有りますが。便宜上。末計りになつた智惠を後得智として。其本の方のを指して根本智と申すのだと致しましてよからうと思ます。斯の如く定義を下して見ますれば。根本智は宛も大綱を總べたる如く。後得智は其細則を設けたるやの趣が存します。今此關係に就て。假に一箇の譬喩を設けて說明して見ますれば。茲に一匹の蟻があつて。象の上を這つて居ると想像いたします。蟻の如き小さな者が。象の體に引付ひて這ふて居る間は。遂に其全體の形狀の如何樣なるものかを知

ることが出來ますまい。併しながら此處は丸くして長きものであるとか。此處は白くして固きものであるとか。此處は廣くして殆ど平面の觀があるとか。此處は又大くして直く宛も柱の趣きがあるとか。色々の看察をすることは出來ます。顧ふに此等の看察は。看察として毫も間違つた所はありません。併し唯是だけでは尙自分の這ふて居る物體の全體に關する考が少しも纏らないでせう。蟻たるもの。是に於て唯とつおいつ。勞して甲斐なき心配をする計りです。そこで蟻が象の體に附着して居る間は。何時まで立つても同じ事でありますが。もし一度之を離れて。近傍の木の上にでも登りますれば唯何かなし大なる體のものありて眼前に横たはり。成程是が象かといふことになります。そして無論此だけでも已に象といふものを捕へては居るのですが。未だ別に鼻とか。牙とか。背とか。足とか云ふものを區別して。知つて居る譯では有りません。是が先づ無差別平等の本體でありませう。處で面白いことは。此無差別平等の中に在つて。尙能く注意して見て居ますと。白くして固きは牙となり。丸くして長きは鼻となり。廣くして平きは背となり。直くして大きは足となりまして。能く判然たる差別が付て參りますので有ります。但し付て參ると申しましても。決して其差別が後から出來るといふのでなく。勿論かの象といふ平等の中には。最初から具備せられたものに相違ありませぬ。それ故好しや平等體を根本智と申しましても。此は無差別平等ではない。有差別平等たること勿論であります。もし唯蟻が象の全體を知ることなく。何時までも局部々々で判別に迷ふて居ますならばそれこそ眞の無平等差別であつて。此れは後

佛說は世說と矛盾するものにあらず

得智と申すことが出來ます。是て一通り二つの智惠の關係が明白になつただらうと思はれます。從て又從來一般世人の持つて居ります大なる疑問。即ち佛說と世說と矛盾するだらうといふ考の。間違つて居ることも明白になります。つまり已に詳說せる如く。後得智は根本智の中に含まれて仕舞つて居るので。何處にも矛盾する處が有り樣がないのです。故に世間て常に八ヶ間敷ひ如く。一の事を捕へて或は眞といひ僞といひ。右といひ左といひましてもそれは少しも構ひませぬ。殊に輓近科學の進步實に著しく。日に新月に新にして。古來の迷說は固より。昨日の是も今日の非となり行く有樣てありますが。此等も毫も愕くに足りませぬ。それて元來禪には間違つたといふことは無ひ譯てすが。併し若し此等の變迁を單に差別の上から見ますれば。昨を是として禪は已に誤て。今を是とする禪も亦々明日の疑てありませう。只是を根本智の上から見て。始めて彼の變迁常なきものは。實に本體の變化活動する所以なので。決して物それ自身の變迁てないことが知れて參ります。そこて其變化活動は時と場合てどの樣にてもなり得ますので。例之ば玆に机といふ根本智ありて。其長何程と尋ねます。然らばそれは他の長との比較を取ることになりまして。所謂差別に亘つた活動の處てす。そこて或は只だ目分量で二尺餘りとも。二尺五寸には足らぬとも言へませうし。或は精密に尺度を當てゝ。二尺三寸何分何厘とも言出すことが出來ませう。つまり此差別の立樣は。或は精しく。或は粗く。或は正しく。或は誤まつて。甲是乙非更に取留の付きかねる樣な事も有りませう。併し如何に紛然として取留が付きかねても。そこに又大に取

禪境は却て精の又精なる處にあり

留の付く處が存しますので。思ふまゝ考ふるまゝ。自由自在に立働いてそれで少しも抵觸する所はありません。然れば人ありて若し十分精密に差別を付けて見やうと云ふことならば。それは只た宜しく思ふ存分やるべきであります。其遣る所に常に禪は活現して參ります。試に一二の例を擧げて見れば。時勢の進歩。徒歩や肩輿が汽車や汽船に變はらうとも。行燈提灯が瓦斯や電燈に壓倒せられやうとも。決して禪機が欠損したのではありません。鐵脚と炬眼とを有した古人が禪の全機を握つて居たならば。電燈や汽車を有する今人も亦微塵此の道を踏み外づしては居りませぬ。釋迦や達摩の說き置かれた事でも。實際事實に反對して。今日の學問上惡るいと定まつた點あらば。是とてもどし〳〵變更して差支のあらう筈がない。信ぜられない事をも。只だ盲從して斯樣だそうなといふ樣では。如何に佛祖の金言でも。眞の禪境を去ること已に是白雲萬里と云はねばなりませぬ。聞說く。經典に須彌山說と云ふものがあつて天動說を唱道するそうですが。それは何時の事實の上から立論したものか。未だ詳しひ說明を聞きませんから知らないですが。余輩科學者にあつては。兎も角自家に一定の見處があつて。今日の處どうしても地動說でなければ成らぬと云ふ事を確信して動きませぬ。勿論前章に於ても詳論いたしました如く。吾人の理論は全く一時的のもので。何時又この地動說が廢棄せらるゝ樣になるかも知れませぬが。それまでは他の何等の所說と比較しても最も確實なるものなることは主張して措かざる次第であります。斯の如く確然信じて疑はない所は。實に是れ佛祖も不議。冤外も窺ふこと能はざる妙境て

是什麼今破磁碗

ありまして。實際それが事實であつても。無くても。毫も問ふ所ではありませぬ。今それ斯の如く。徹頭徹尾。古德と反對せる意見を把持する場合に於ても。猶ほ能く依然として禪宗門下の徒であると申すとを得るが如きは。如何にも能く禪の宏大無邊なることを知らしむるに足るだらうと思ひます。そこで此靈妙なる關係を更に卑近なる事實に徵して說明して見ませうならば。例之ば茲に一箇の古茶碗を想像いたします。茶人は之を以て或は千金の珍とも致しませう。余輩は遂に爲めに一錢を投ずるを吝むかも知れませぬ。之を廉なりとして千金を抛つ人にも。必ず見る所が有りませうし。少しも欲しくないと云ふ余輩にも。亦た相當の理屈がなければなりませぬ。唯茲に最も可笑しひのはその茶碗であつて。甲是乙非の論中に在れども。超然として少しも元の本領を失はないです。顧ふに禪機も亦猶ほ斯の如きか。唯能く冷暖自知して親しく實地を檢査し見るに限りませう

以上縷述する如く。禪は決して學問を否認するものでは有りませぬ。是非得失は實に唯學問と學問との上にありまして。禪は却て常に其何れの側に於ても存在して居ります。顧ふに已に本體あり。何ぞその活動なくして止むべけんや。唯〻須く論難に論難を加へ。精は益精。密は益密なるべく。斯の如くにして始めて能く百工技藝。妙を盡くし巧を極めて。茲に禪の活劇を演出し來るのて有りませう。是に至つて誰か又た法律を以て禪にあらずと云ひ。科學を以て禪にあらずと云ひ。醫學を以て禪にあらずと云ひ。其他一切萬法を以て凡て禪にあらずと云ひ得ませうや。禪の禪たる所以至大なりと謂ふべきて有りまず

一切地水是我前身。一切火風是我本體。

梵網經

一切治生産業。皆與實相不相違背。

法華經

丈夫自有衝天氣。不向如來行處行。

傳灯錄

禪の宗敎たる所以

第六章　禪と人道

昔者。黃檗。七赤之軀。額に圓珠あり。見るから恐ろしき大男が。日に七百拜を行ひつゝ。佛に著て求めず。法に著て求めず。衆に著て求めず。常に禮すること是の如しと。喝破して居たそうですが。究竟黃檗は何を見て禮拜したものでせう。是他にあらず。禪の境涯は宏大無邊。蓋天蓋地にして。之を內に得て胸襟海の如く濶く。之を外に望んで高標轉た欽すべき者あり。人間をして能く自家の醜陋なることを覺り。不知不識。敬虔の念を起さしむるに至るものがあるからで有ります。此の如き崇高なる一物は。結んで終に神ともなり。佛ともなりて。玆に實敎と云ふものを現出するので有りますが。併し禪の宗敎として重をなす所以は。決して單に人間の謙遜にの

み由るのでは有りません。禪其者の教理の上から。衆生濟度は實に必然の結果で有りまして。爲めに內外相應じて能く此の如く偉大なる勢力を古今に發揚いたしました譯で有ります。そこで普通の宗教では。生死得脫。勸善懲惡などを以て。殆ど唯一の目的として居るのですが。禪ではもし是斗りが其本分だと考へられる樣では。甚しき迷惑を感じる次第なので。つまり其境涯は。已に屢縷述致しました如く。廓然として能く萬象を包有致しますので。學問でも技藝でも。悉く皆其中に含有せられて居る譯です。唯其中に特に人倫に關したものが有つて。それが恰も世に所謂宗教てふものと同樣の事を遣りますのです。然るに如何にも禪の卓越した所で有りますのは。其宗教としての作用が。又實に非凡なるもので有る事で。衆生濟度も決して無理やりに茲に漕ぎ着けるのではなく禪の境涯を手に入れゝば。自然と亦た此の作用あるに至るので有ります。今夫れ無差別の中に差別が生じ。善は何處までも善にして惡は惡なり。苦は何處までも苦にして樂は樂なりと致しますれば。其苦を遁れて樂に入り。惡を去つて善に就かんと致しますのは。實に人情の當然で。それが進んで更にこの人情を遂げさせ樣と致しますのも。亦た禪の差別上到底禁ずべからざる所で有ります。左れば坐禪儀にも。宜しく先づ慈悲心を起して衆生の濟度を本願とし。一身の爲めに獨り解脫を求めざるべしと說てありません。勿論差別の立て樣で。縱のものを橫とも云へますのは。前章已に論說いたしました通りで。慈悲も濟度も要らぬ事と腹の据はつた人が有れば。禪の端的は矢張そこに圓滿具足して居るに相違ないですが。併し三段論法卽ち凡夫の境涯

に於ては。人も好かれ我も好かれと申します博愛の精神が。寸毫間違つて居やう筈がないので。誠の禪は是非とも利己の陋域を脱し。弘く社界の爲めに盡くし。自利利他共に正覺を成すべきものと致します。併し顧ふに此事も禪の慣用手段の上から見れば唯だ差別の立て方は自由自在。勝手放題と云つて置くべきで有りますが。此點だけは特に進んで慈悲博愛と標榜して居りますので。此が卽ち禪をして特に宗教として一着歩を占めしむる所以なので。此處如何にもその灰頭土面。靈龜尾を曳くの謗を辭せざるの慨あるを見るに足ります。以上の所說により。禪の人道に關する一般を總說し得たと信じます故。是から日常遭遇いたします二三の實地問題を捉へて。禪が其本體上如何に之を解決しますかを陳述して見ませう。勿論此等の解決も。已にかの境涯を握つた人ならば。唯だ求めずして自然に玆に到着するので有りますが。若し徒に玆に縷述した所を覺えて。其通り試みて見やうと申しましても。それは實に無益の話です。必竟禪は已に詳說した如く。立處に眞を得。隨處に主となるを要する者なので。而かも此の如き絕對の境涯は。唯だ萬念空しき處に於て。始めて生ずることを得るのですから。例之ば近い話が。若し苦しひと云ふ時に。尙ほ愉快なといふ念が殘り。樂しひと云ひつゝも。まだ悲しひと云ふ情が取れない樣では。其苦しみも樂みも。未だ決して本分の田地に到着した者では有りますまい。顧ふに唯無心ならば。則ち能く有心なるべし。須く先づ人間の是と非を一掃して。洒々落々。胸襟水の如くにして。始めて能く以下の條項を活現せしむる事が出來るので有ります

死生の問題

偖第一には。死生の問題で有りますが。是は御承知の如く。人類あつて以來の難問で。或は不可解を說ひて。懷疑の淵に沈めるもあらん。或は榮枯盛衰の理を看じて。是生滅の法と諦らめしもあらん。或は死して後始めて永久の生を享くべしと信ずるもあらん。或は又此世限りで後は野となれ山となれ。何うでも宜ひと斷ずるもあらん佐藤一齋の言志錄には。死之後卽生之前。生之前卽死之後。而吾性之所以爲性者。恒在於死生之外。と曰ふて有ります。蓋し古來の哲人が。千々に思を勞しつゝ。或は解き得たりと爲し。或は解き得べからずと爲し。是非紛々。至難の論決して余輩の容喙を許すべきでは有りませんが。併し敢て古人の說を批評して見樣と申すのではなく。唯だ單に自分の經驗の上から考へて見ますに。如何しても道理上卽ち相對的に成立しました覺悟は。其相對の關係が維持せられて居る間は。有効でありますが。苟も其關係の一角でも缺けて仕舞へば。直に紊亂して參ります。そこで事實上死生の問題が現出して來る樣な場合は。多くは皆咄嗟の間で有りまして。不意に胸先に鋒鋩が肉くとか。或は非常な重症に犯されて。只だ苦しひと云ふ外餘念に遑が無ひとか申す樣な事で。日常平氣な時分の思慮分別が。毫末も間尺に合ひませぬ。否。それ等の分別をして居る餘地が無く。彼の三角測量に於ける諸點の位置を失つた樣な事になつて仕舞ふのです。世諺に能く「叶はぬ時の神頼み」といふ事を申しますし。殊に老人等には信神家が多い樣でありますが。此の如きは必竟只だ死にたくない。何うか致したいと云ふ慾心一片で。若ひ時又は平氣な時に。一と角あつて便りとした思慮分別が。成り立たなくなつて參りました適例で有

思案の外は正に禪の領域なり

るので。生者必滅も。生死一如も。切ッ双詰つて其瞬間に畫き出だそうといふには。餘り複雜すぎるのです。そこで其苦しひとか死にたく無ひとか申します樣な考は。已に他の一切の分別を遮斷して仕舞つた處なので。何んな見悪しひ行があらうとも。何んな未錬な擧動を働いても。本人少しも自覺のない地位に立つて居る譯であります。彼の俗に色を「思案の外」と申して居ります處などは。實に千古の卓見たるに愧ちませぬ。斯くの如くして。如何なる立派な道理はありましても。それは只日頃の用を辨ずるのみで正かの時には多くは無用に歸する計りですが。凡て此等の場合に處して。禪では如何樣に取計らふで有りませうか。思慮分別の外と云ふ其場合は。當然已に禪の領域に屬する處で。今更何にも驚く譯は有りません。左りながら禪では。云々の折には斯く動き。云々の折には彼あ振舞ふと申す樣な。定盤星を認むることは到底有り得べからざる處で。色に狂へば狂ふまゝ。愚痴に落つれば落ちたまゝ。路頭の狂犬我を吠ゆれば。直其儘にワンワン〳〵。一道の劍花胸間に閃めけば。又其儘にピカ〳〵ピカ。人の病んで將に死せんとするや。呻吟々々又呻吟。唯だ是の如き而已。しかもそれで何う生死を得脫して居るでせう。此は言語文學の說明し得る限でない。必竟是兩頭俱截斷して。其場々々の絕對を保つ樣になりますれば。自然と會得の出來ることで有ります。併しながら唯是だけでは碎けても瓦か玉か分らない樣なものですが。禪では實は此平等無差別の間から。又歷然たる差別を立てることが出來ますので。古來能く死生の間從容として亂れず。人事を盡くして天命を待つた事例は。決して枚擧に遑が有りません。小早川隆景

人事を盡くして天命を待つ

と申す人は。實際禪學を脩した人か否やは知りませんが。併し此位の人物に成つて見ますと。無論自ら左右逢原の妙が現はれますので。曾て大小幾百戰を經來つての述懷が面白いです。今正確なる言句は記憶して居ませんが。何んでも。初めて實戰に臨んで見た時分は。唯だ宛も暗中に物を探ぐるが如き心持で。それから次第に朧夜が月夜の樣に感ぜられ。終には最早白晝に横行濶歩するの趣が得られたと云ふことで有ります。今それ誠の武士ならば。好しや初陣の曉でも。命は兼て無き者と申す位の覺悟はあるでせう。然もまだそれ位の覺悟では。單に道理から出た覺悟たるに過ぎないので。イザヤと申す場合には。何の役にも立たないとは。彼の隆景の述懷で明白であります。去りながら其暗中物を探ぐるの場は。已に是平等差別。生死得脱の場で。それが又自然と有

何ぞ膽力養成といはん

差別の場に轉じまして。是から先は自由自在。正に是れ暗頭來や暗頭打。明頭來や明頭打。四方八面來や八面打の趣が存します。要するに。禪では唯それ無心にして始めて能く有心なりと云ふ本文通りに過ぎませんで。敢て膽力養成とも。生死一如とも申しません。從て又生に對して死が畏ろしいとも謂はず。死に對して生が惜しいとも云はず。生は方に生にして。死は方に死なり。然かも死は生の息む處にして。惜しい時には何時でも惜しい。百の命を二百もがなとは。至極御尤なる御希望だと申上ぐるので有ります。斯の如くして生死兩頭。相交錯せる中に於て。何處か知らずその紛紜を解脱して。安身立命の地を占めて居るといふのが。如何にも禪の面白い處で有ります。生死の大事に於て。已に安心の場ありとすれば。貧富貴賤の間に處しても。亦た能く綽々として餘裕

禪は世上の艱難を畏るゝ者に非ず

あるを見ますのも。禪に於て固より當然の處で有るので。彼の中庸に謂はゆる。富貴に素して富貴に行ひ。貧賤に素して貧賤に行ひ。夷狄に素して夷狄に行ひ。患難に素して患難に行ふ。君子入るとして自得せざるは無しと曰ふものは。正しく是れ禪の眞面目であります。然れば若し險に居て易きを思ひ。苦に居て樂を羨むが如き者あらば。そは勿論已に禪機を失ふて居るもので。特にかの禪を以て一種の厭世教なるが如くに心得て居る輩に至ては。固より未だ共に禪を談ずるに足らざる者であります。

善惡の辯

次には。善惡の論で有ります。是も先づ余輩の經驗の上から始めて見ますが。世間で申しますことには。何うも前後不揃の事のみ多くて。例之ば。小善といへども必ず爲し。小惡といへども必ず避け。財寶を重んぜず。權勢に阿附せざれなどゝ申しますことは。凡そ人と云ふ人。已に少しでも事理を解する樣に成つてからは。是非とも之を以て敎へ込まれぬものはないので。余輩も亦固より是に心がけて。出來ぬながらも尙ほ年來の心血を注いだ考でありますが。然るに玆に實に可笑ひ一事は。世間では敎ゆる時には。何時も斯の如く敎へながら。實地に臨んでは往々之と正反對の行爲を以て。吾人に强ひんとするに在るのです。是實に從來余輩が社會に向ふて。一大不平を抱くことを禁ずる能はず。屢左の一戲文を誦して。自ら快とするの境遇に立たざるを得ざりしを悲む所以なので有ります。其文に曰く

師直は鎌倉の執事職。足利直義社參に就ては第一の大役。殊更勅使馳走の大小名を指揮して。例式作法を敎授す。博達聰明の士ならずんば。此役義勤り難し。然るに鹽谷判官

等。此度馳走の役義を蒙り。萬事師直が引廻しに預り。時宜の指圖を受け。殊には禮法古實の師範なれば。諂ふにてもなく。阿るにてもなく。身分相應の謝儀贈り物は有るべき筈なるに。是まで何の會釋にも及ばず。剩へ館に於て。女房よりの文箱を手づから達し。師直に恥辱を與へんとする仕方。言語道斷不出來の至りなり。きかぬ藥を飲んでさへ。相應の謝禮をするは世上の習はし。まして況や判官等師直無かつせば。座頭の杖を失ふ如く。忽ち役義の勤まらぬは目前。鄉右衞門等が吝嗇から起る事とは云ながら。師直の立腹無理ならぬ事なり。若狹之介は本藏が計らひにて。師直が取成もよく。役筋首尾よく勤め。第一は君への忠義。身の面目。一方ならぬ手柄と云べし。世間只師直を譏る。役筋一途に於て少しも瑾なし。只判官が妻顏世に戀慕の事。師直が不調法也。併文歌などの往來計にて。綻と密通したるにも非らざれば。左まで咎むる程の事にも非らじ。或人の曰。師直程の侍が判官に切かけられて拔合せもせず。逃隱るゝは卑怯の至りといふべしと。予が曰。然らず。是は直義社參の本陣。殊に勅使饗應の折柄なる故に。場處を憚り拔合せざる也。かゝる急場に至りても。君臣の義を重んじ。進退禮を守るの士と謂ふべし。然る故に判官には切腹仰付られしかども。師直には聊かの御咎もなし。是等にても考知るべきなり。

此文未だ何人の作なるやを知りませぬ。併し讀んで結尾に至るまで。節々皆案を拍つて快哉を叫ばぬことは有りませぬ。道ふこと莫れ。冷調にして却て世を罵ると。顧ふに今日の社交上に於て。能く圓滿なる人物と呼ばるゝ人間に。眞實斯

至誠息むなしとは何ぞや

の如き意見を懷かざるもの。果して幾人ありや。物變り星移りて。前後左右當りさわりの無き今日。二百年前赤穗の事を論ずればこそ。皆高聲に理非曲直を判じて誤まらざれ。其當時吉良に由緣の面々にて。眞面目に上文の如き挨拶を繰返へして。我こそ世渡りの名人よと思ひ込みたる輩も。決して少からぬ事なりしなるべし。矢釜しき道德論が眞ならば。蓋棺の後は且く措き。生きたる中は迚も世に容れらるゝ望なく。枉げて容れられんとせば。往々自ら日蔭仕事と思へることをもせねばならず。此間に在つて將た如何が身を處せん是れ何人も皆必ず當に撞着すべき問題で有りませう。次に又此は在昔から人の氣付ひて居る處で有りますが。儒敎の中に。或は至誠息むなしとか。或は道は須臾も離るべからず。離るべきは道にあらずとか。或は造次にも必ず之に於てし。顚沛にも必らず之に於てすとか。申して有りますが。此等の語の眞意は。通例世間で稱へて居る善とか。惡とか。誠とか。嘘とか云ふ樣な意味の上からでは。到底了知することは出來ないのです。例之ば。誰でも造次顚沛の語を說きますに。立つ時にも道を失はぬ樣に立ち。坐する時にも道を失はぬ樣に坐せよと云ふ事であると申しませう。併しながら。已に斯々の行爲は善にして。斯々の行爲は惡であると云ふ樣に。善惡の問歷然たる區別が立て居ます以上。何うしても同じ立つ中にも。道に合した立ち方と。道に背いた立ち方とが有るに相違ないです。例之ば人を撲ぐる爲めに立つのは惡で。人を助くる爲めに立つのは善と致します。併し腹が立つたら人も撲ぐらうし。義已むを得ざれば嘘も謂はねばなりますまい。是の如きは人生にあつて到底避く可からざる次第で。何

善とは何ぞや

人でも必ず此は爲るのです。故につまり息むなきの至誠も。離るべからざるの道と云ふことも。實際有り得べからざる事に成りますが。併し斯かる結果の生ずるのは。決して聖人の本意では無く。唯解し方が悪るいのに歸すべきであります。次に又一歩を進めて。善悪其者の資格に關する論がありまして。一派の論者は善と云ひ。悪と云ひ。必竟生存上の便宜から見た分類法で。時代と地勢と人情とによりては。何の樣にも變化し行く可きものと說き。他の一派は親に孝行をするといふことが。左樣に無闇と變動して好いものかと論じます。更に又人性の善悪論に就ては。誰人も皆熟知する如く。先賢の議論の八ケましかつた處でありまして。之を今日の進化論から見ますれば。矢張元とは動物の性情の發達したものに過ぎないと致しませう。要するに以上陳述しました

只須く兩頭を截斷して善悪の外に出づべし

場合は固より。其他尙ほ種々の機會に於て。常に現出し來ります困難は。議論が何時も唯兩頭に墮して。相對的に是非得失を判定致さうとする處に存しますので。是では無論善も悪も時世と共に推移しませうし。兎に角現今諸人の爭ふて居ります通りの外に何とも落着の出來樣が有りません。そこで禪では何う申しますか。禪の境涯から見れば體々皆露。箇々卽全眞で。善なるものも。悪なる者も。差別はないので。凡て皆同一境涯に歸せしめて仕舞ます。從て盜賊でも。人殺でも。學者でも。親孝行でも。馬前の討死でも。女郎との情死でも。乃至は立つても。坐はつても。均是れ善である。否。善でも悪でもなく。唯是天地の眞面目であると申します。然かも又此の無差別平等の眞唯中から。善は自然と善と現はれ。悪は自然と悪と働き。玆に善悪交叉して。社會の活動が付ひて參る

ので有ります。王陽明の所謂無善無悪心之體。有善有悪意之動と申しますのは。正に此處の事で。つまり本體が動いて始めて三段論法が成り立つと申すことで有ります。夫れ是の如く。善悪は本と一如にして而かも二途に出でます。悪を悪として動かず。善を善として離るゝ能はざると。善を以て悪とし。悪を以て善とし。玉石混淆して取捨する能はざると。皆是れ共に斷常の妄見たるを免れませぬ。彼の徒に左支右吾して己の進退に惑ひます如きは。必竟自ら招げる禍なりと謂ふ可きで有ります人若し一たび善悪有無の中庸に立つことを得ますれば。何んの世の中の紛々擾々たる位は。終に是れ虻の羽音位にも思はない樣になりませう。善悪論に對する禪の見解の如何に破天荒なるやは。以て知る可きで有ります。因に申して置きますが。世間で道德と申しますこと

廣義に於ける道德

は。極狹義に於て用ひられて居るので。多くは勸善懲悪の外に出でない樣です。併し禪では言ふまでもなく。唯其場々々の絕對を保持する上に。眞の道德が存するのを認めますので。少しも善とも悪とも限られて居ません。百姓が畑を堀り。商人が天秤棒を肩にして居る中に。大道德家大慈善家たる所が現前して居ると申すので。つまり何事をするにも。熱心が第一肝要で。バイブルや經典は。西に行かうか東に行かうかと謂ふ時の。地圖か栞に過ぎぬものとなるのです

獨立自尊

次に。此頃世間で唱へられて居ります。獨立自尊と云ふことに就て一言して見ませう。是は誠に面白い事でありますが。併しどうも世間で考へて居るだけの事では。實行上必ず忽ち支障を生じて來ねばなりませぬ。それは若し獨立自尊だからと申しまして。何時でも自分の見識を振り回はすこと

小僧小使も亦た能く獨立自尊なり

と致しますれば。其結果は敢て多言を要せざる所であります。元來禪では天上天下唯我獨尊と稱べまして。獨立自尊の本家本元であるので。其坐作進退は何うやつて居るかと尋ねまするに。それが如何にも自由自在で。圓轉滑脫盤上珠を轉ずるの妙を見るです。天上天下唯我獨尊とは蓋し讀で字の如く。常に自ら乾坤唯一人の慨を保つて居ることで。雄略大圖。雲の大く風の如き奈翁や亞歷山の如きは云ふまでもなく。却て又小僧や小使の賤業に服して。孜々汲々として怒罵嗔拳を甘んずるの作用があるです。そこで如何にして小僧小使に。乾坤唯一人の實ありやと問ひますに。是は唯だ小僧小使の何處までも小僧小使らしき處に在つて存します。決して小僧ながら未來の英雄を氣取つて居るとか云ふ樣な事ではないので有ります。その小僧をして小僧らしからしむる道は外でもなく。卽ちかの乾坤唯一人の實を擧ぐるに在りまして。例之ば命を受くると共に。卽坐に自ら主人の心に成つて仕舞つて。自分の外に用を命ずる主人なく命ぜられたる用もなく。爲すべき仕事をサラ〳〵と仕て行くだけの事になるです。若夫れ然らずして兎や角自分を逐ひ回はす者があつたり。眼前に山の如き雜務が積まれて居ると申す樣な感じがありましては。小僧たるの神聖は實に甚しく侮辱せられて居ると申すべきで有ります近頃。或る神學者の友を愛すること己の如くせよと云ふことに就て。著しく複雜せる意見を陳べて居るのを聞きましたが。此等も唯我獨尊法を用ゆれば。唯だ自ら此の結果に到着いたします。のです。卽ちそれは卽坐に我友になつて仕舞ふだけの事で。我の外に友なく友の外に我がない。我が欲する所に從ふて

虛心坦懷は獨立心の一手段なり

而かも友の利益の外に出でないのは當然の結果で有りまして何も六ケしく論究して居ることはないです。古語に虛心坦懷といふことを盛に說て有りますが。これも必竟先づ己を空うして然る後能く己を活動せしめ得るので。所謂獨立自尊を實行する大本旨に合ふた語で有ると申すべきで有ります。偖て斯の如く。何事に就ても例の絕對を保ちますれば。行住坐臥隨處に能く獨立自尊なるを得て。敢て別に拘々として自尊の方法を求むべきでは有りませず。況や小僧小使なりとても。常に主人に服從するが宜しいと極まつた譯でもありますまい。何を命ぜられても少しも用事を致しませず打つても毆つても頭を回らさゞる處に於て。又復美事なる獨立自尊が認め得られるので有ります。併し是の如きは。啞々說明するの却て無益なるを見まして。要只だ自ら

思慮分別は須く深重なるべし

その實地に闖入し。思ふ通りに振舉ふて見るのが第一で有ります

次に又世間で能く申します生分別とか生學問とか云ふ樣なことは。禪では到底あり得べからざるものなることを陳述して見ませう。此譚は或は僻論として斥くる人が有るかも知れませぬが。余輩は自ら一隻眼を具せりと信じます故。強て玆に引照いたしますが。伊藤仁齋曾て東海道で追剝に遭ひました時。彼未だ追剝の何者たるを知らず。一體貴樣は何を業とするかと問ひましたら。賊は乃ち實を以て之に答へて。財を奪ひ寶を掠めて己が有とするのだと申しました。仁齋之を聞て稍一刻深き思案に沈みましたが。忽ち決然として起き來て。刀を拔き賊を散らしたと云ふことで有ります。此事を論ずるに或は仁齋の學を好んで而かも迂愚なる

を笑ひ。然らざれば其儒生にも不似合なる勇悍に感心するのを見るのです。併し余輩の眼は少しく之と異りますので。仁齋が賊を知らなんだとか。或は之を取挫ひだとか申す樣な事は。凡て皆末の話に屬するとして。全體仁齋が稍一刻深き思案に沈みましたのは。何の思案で有りましたらう。蓋し仁齋は賊と聞て。是は惡人である惡人は千金の身を賭しても猶須く之を退治すべきである。若又た出來得べくんば。懲して迄も。更に再び正道に復へしてやり度ものとの考を起し。偖てその考を格して奮然起き來る迄に彼の一刻を費したので有りませう。顧ふに仁齋が賊と聞て其惡むべきを知つた智識の深は何程あつたものでせう。世人は能く盜賊の惡むべき者なることを說きます。併し正義を唱へる自分が。到底屈服することが出來ないと云ふ迄に。盜賊を精知して居りませうか。盜賊の命令を拒絕する位はまだ有りませう。如何なる窮迫の時に臨んでも尙能くかの「武士は喰はねど高楊枝」と申す如き。高潔なる操行を維持する者が。當今の世の中に多く有りませうか。要するに。惡ひことを惡ひと知り。惡ひと知つた以上。天が崩れても地が裂けても。何處までも惡ひで推し通す。惡ひ樣な惡くない樣な。曖昧たる智識は忌むべきで有ります。凡て物を考へ事をなす上に於て。此の徹底窮め盡くすと云ふ處が。實に何よりも大切な處で有りまして。余輩は之を仁齋の上に見るです。併し只之を仁齋の美德として捨て置くべきでは有りません。禪の境涯は忽ち何人をしても玆の地位に達せしむるのでありまして。正を正とし邪を邪とし。明を明にして暗は暗なりと云ふ位の事は。凡て衲僧家尋常の茶飯に過ぎないとで有ります。然れば學

問には須く生硬を忌むべく。思慮には須く淺薄を嫌ふべく。士農工商亦各己が職分に對して。須く其全力を盡くすべきで有ります。絶對は唯必死と活動する上に存しまして。ノラリクラリは遂に是れ宇宙の大道で有りませぬ

天下の眞人物

終に臨んで。天下の眞人物と申すことを一言致します。世人はノラリクラリの無用なること位は。大略知つて居ります。唯だそれを止めることが出來ないのは。如何にも致方のない次第ですが。それよりも世人が皆一般に希望して居る事で。學者になりたい。豪傑になりたいと申すことも。矢張無用の骨頂で有ります。此事を知つて居る人は誠に少い。愚物の智者たる能はざるは申す迄もないですが。智者も亦遂に愚物たることを得ませぬ。愚に歸することの出來ない樣な智者は。何んとしても不自由な次第で。智愚共に其片輪たるに

賢人も愚人も共に片輪者なり

於ては何等の差異をも認めないので有ります。必竟智者は自ら智者なりと思ふ念が取れない。此念あるは卽ち絶對の上の瑕であつて。智識未だ熟せざるの證であります。顧ふに眞に大智大勇なる人は。只自ら知らずして而も能く大智大勇なるを得るので。其知らぬ處は直に是れ愚物で有ります。已に自ら標榜する所なく。之を痴なりと云はんか。能く其事業の常流を拔くものあるを奈何。之を賢なりと云はんか。其平生の如何にも平々凡々たる者あるを奈何。必竟痴聖兼ね備へ。清濁併せ呑んで。恢々たる巨腹。渾然として玉の如く。些の圭角だもなき人物を現前するので有りませう。語に曰く味噌の味噌くさきは上味噌にあらずと。當今天下の人材なる者。幾人か能くこの上味噌を値ひするものならん。況や其末流の徒が。蝸牛角上尙ほ大なりとして。明けても暮れても

蒼蠅さき小ぜり合に。その精力を消耗し盡さんと致します
のは。要只だ夫の屑々たる片輪智惠に追廻はされて。自ら苦
しむの陋に坐すると申さなければ成りません

無事是貴人。
知らぬが佛。
心廣體胖。

曾子

老者安之。朋友信之。少者懷之。

孔子

父爲子隱。子爲父隱。直在於其中矣。

孔子

禪の弊や魔道に墜ちん

第七章　修禪の機

人若し一たび眞禪を修し得ば。之を道德としては天下の眞人となり。之を學術としては。宇宙の眞相を明かに致しまして。人生一日も忽諸に付すべき者では有りません。然るに般若の智と云ふは。元と〳〵細大本末兼ね備へて。分厘も遺す所がないのですが。併し先づ其大を提げて。後其細に及び。本を究めて而して末を訪ぬるのを順と致しますから。已に其本と大とを見て仕舞ふた跡は。幾ら精細に見ましても。遂に最初捕へた者の外に出でないことになつて。其弊や。學人にして若し大悲心を起し。衆生の濟度人生の福利を志願と致しませぬ時には。人事と全く交渉を絶ち。獨り一身の安樂を貪ることゝなります。換言すれば。常に平等無差別の中に隱

學術の弊や兩頭に迷はん

れて。醫者が治療を嫌ひ。商人が商買を嫌ひ。坊主が說敎を嫌ひ。學者が研究を嫌ふといふ樣なことになります。そんなことになりましては。世の中はどうなるでせう。悟らぬ凡夫が迷惑です。禪學は決して左樣な無法なものではないですが所謂願の持方では。直に之に陷るです。彼の世間に禪を學んで未だ熟せざる輩が。或は得々として花柳の巷に遊び。或は無法にも腕力を弄して。徒に他人を苦しむる等の行爲を致すことのあるは。何れも皆大を見て。未だ小を知らざるの罪に坐するので有ります。翻て又科學の智は主として細より入り。末より入りますので。其弊や何時でも兩頭に墮して。全く大體を透看するの明を缺きます。無論この差別の業が。直に是禪なのですが。天下の達人にして。苟も自然に禪機を會する者に非らざるよりは。必ず皆岐路に彷徨するの否運を

修禪の機

免れませぬ。そこで人生の上から考へて見れば。禪をやつて何の用にも立たないよりは。一生懸命に仕事を勵んで貰ふた方が遙に增しで有りまして。白隱禪師も

商買が兩手を打つてなるならば
隻手のこえは聞くに及ばず

と曰はれてあるです。併しこれとても「成るならば」とありまして。決して絕對的無用とは謂つて有りませぬ。そこで修禪の機と言ふ事が成り立つて來ますので。實際「成るならば」禪などは少しも遣るには及びませぬ。どうしても成らぬと云ふ處へ來て。始て修禪の機を見るです。顧ふに何人でも一生懸命に己の業務を勵みまして。何處までもスラ〳〵と行ける者は少ない。其行けるものは此れは必ず達人の部に入るべきもので。白隱の印可の出る方ですが。其他は皆左支右吾。

何を遣つても蹶くとか。或はどうも中途に滯つて。思ふ處まで成功することが出來ないとか。兎も角早く現在の境涯を脱出して。今一段上の場に達したいと。申す處に至るものでありります。此は實際勵めば勵むほど。愈早く此境に達しまして。何うも此のまゝでは。商買の成らぬと云ふことを自覺する樣になつて。そこで白隱は隻手の聲を聞ひたら如何うだと申すのです。併し顧ふに世間の多數は。常に順境に在つて別段困まつた事にも出合はなければ。もうそれで好いとして。甘んじて居る爲めに。此の窮迫せる境涯まで到着することが出來ません。此等の徒が如何にも得意らしく。禪學を以て一無用の長物なるかの如く申して居ますのは。宛も自分は天下の達人であると慢心して壯舞つて居るのか。左もなければ。自ら何處までも平々凡々。食ふて寐て死ぬれば宜い

大疑の下に大悟あり

と濟まして仕舞ふて居る樣なものでありるです。寄語す世間一切の衆生よ。商人は須らく商人の道を勉むべし。百姓は須く百姓の道を勉むべし。勉め勉めて寸時も怠ることなければ。それ等の世音は鄉等をして忽ち一歩を竿頭に進めしめ遂に能く歸家穩坐底のものの有るを得せしむるで有りませう。處で余輩は今百姓の道。商人の道と說きましたが。此れもそう申して仕舞ふては。已に大に自ら向上の一路を狹めるの陋に落つるので有つて。其實は何事でもよいです。然れば。若し世に生死に迷ふものあらば。迷ふて迷ふて終に能く生死の外に出づるを得べく。因果に昧むものあらば。それ亦同斷終に因果の外に出づべし。仕事嫌ひの朝寢坊たるを嘆ずることなかれ寢て々々而して終に窮する處あらば。渠が破顏微笑の時已に近づけるを知るに足るべく。疎暴偏狂なる

を嘆ずることなかれ。怒て々々而して終に極まる處あらば。則ち亦た遠からずして能く爽然自得の日あるを得ん。要するに世間一切の事。善にまれ惡にまれ。之を叩ひて先づ其蘊底を盡くし。そこで始めて修禪によるとも。自然でなりとも。兎も角一旦豁然として貫通する處あらば。從來幾多の蹤跡復た忽ち生き返つて直ぐ其儘の禪機となり。更に一段の大自在を添へて。以て意想外の進境を認むる樣になりませう。昔者。德山和尙は本是れ講僧にして。大小の經典讀んで究はめざるなし。一旦猛然として感發する行あり。身を禪門に投じて參究具に到り。其能く遂に自立する處あるに至ては。實に是れ活潑々地。轉轆々地にして。神算鬼謀。端倪し難きものがあります。顧ふに此の如きの妙用は凡て何處から湧き來つたものでせう。德山は自ら諸の玄辨を究むるも一毫を大虛に置くが如く世の樞機を竭くすも一滴を巨壑に投ずるに似たりと言つて。多年刻苦の餘に成りました金剛經の疏抄を取て。忽ち一炬に付し去つたと申すことですが。實際渠平生の學問が全く無用であつたでせうか。否。是は決して左樣ではない。只その平生の學問が活動して。却て能く悟後の德山をして此狀語を吐露せしめた者なので德山は最早經に因つて理を說かうとも致しますまいが。若し理を說くに經を以てすることあらば。彼は必ず示すに前一倍の才力を以てしたに相違ないです。左れば若し世の眞禪を修せんと志すものあらば。好し先づ去つて大に自己の本分を盡くすべきで有ります。未だ能く大疑團大困難に遭遇するの場合に至らずして。猥りに禪機を談じましても終に是れ一場の兒戲たるを免れませぬ。試に之を馬に乘るものに譬へます。

十年廿年の修錬を積んで。一鞭を池月磨墨の名馬に加へました處は。實に是れ鞍上に人なく鞍下に馬なきの大妙境で有りますが。併し今臆病未錬の馬鹿者を捕へて。悍馬の鞍坪に繫き付け。後から天秤棒で毆き付けましたら如何うでせう。同じく是れ人もなく馬もない妙境ですが。前者と後者とは其作用に至つて。遂に雲泥の差あるを見るでせう。苟も已に禪を修せんとする以上は。必ずや世間に有益なるものを心懸けべきで有つて。無くて損なく有つて害有る如きの境涯は。斷じて佛祖の本領には合ひませぬ

至於用力之久而一旦豁然貫通焉。則衆物之表裏精粗無不到而吾心之全體大用無不明矣

禪の傳來

禪は文字の上に在らず

第八章　結論

靈山の一會。迦葉の微笑を惹き得ましてより以來。嫡々相傳。四七二三。能く一器の水を一器に移し。今に至て遂に衰へず。聞說く。我朝にては。僧寂澄先きに北禪の一滴水を傳へて。海內に流通し。後文治の頃に至つて。僧榮西再度入宋し。始めて虛菴の法を得て。茲に南禪の正統を開いたそうで有ります。兎も角禪の一派が久しく東洋の天地に雄視して盛に學者の思想を左右して居たことは。何人も皆熟知する處でありまです。然かも此道の本來は。一に諸人の實現活動する上に在て存しまして。決して筆舌口耳の技を待つて始めて成立するものでは有りませぬ。是に於てか。古來の名匠。皆嚴に文字言句の末に就て求むることを戒しめ。千部萬部の經を誦せんよ

りは。寧ろ一掬の涙を濺げよと敎へて有るのです。此は實際どうしても其通りで。之を說かんとすれば。百千萬劫を窮めて。尙ほ說き盡くす能はざるに。之を實行すれば。已に僅に一呼一吸の間に在つて辨ずるので有ります。然れども退て考ふるに。已に自ら此道に入つて實驗實證したる結果を記し。更に之を以て未だ此道に入らざるものの栞ともして。衆生濟度の一端に供せんと致ますのは。又敢て咎むべき行爲とも謂はれませぬ。近頃某氏の佛を講ずるを聞きましたに。小乘門では具體的に偶像まで作つて。之を祀つて居るけれども。經典中佛に關する人相書位。分かり惡ひものはない相です。例之ば佛は無量の壽を具へ。無量の光明を放ち云々。此無量と申しますのは。卽ち絕對といふ意味で。到底之を差別の上で畫き出すことの出來ない筈であるです。釋迦老子之を

文字も亦止むを得ざる所以

知ること已に熟し。然かも猶萬已むを得ずして口を開き。其相好を髣髴の中に顯はさんとして。東說西說橫說竪說。其文積んで五千餘卷の多きに及んで居るそうです。我が禪宗に於ても。不立文字敎外別傳を以て其看板としながら。古來尙幾多の著述あつて。皆後學進德の一方便となつて居ります。顧ふに日記は決して實境では有りません。之を讀む他人にはどうしても無味淡泊何等の感情も起り得ない筈です。然かも之を記した本人には。如何に蕪雜に如何に簡略に記入せられて居るとしても。尙其一言一句が。彼をして深く既往の實況を追憶せしむるの手段となります。左れば禪の著述も。能く自ら實地を踏査した上で書き出された者ならば。何とも分らぬ樣な事でも。尙十分の實價あるものと認むべく。又已に自分でも經過し來つた後に。其等の著述を讀みます

れば。一字一文左右能く其眞を傳へて。心から點頭せらるゝ趣が生じて來ます。斯の如くして古則公案は皆是れ魚を捕ふるの筌となり。月を示すの指に比せられて居まして。求めんとする物其者ではないが。又どうも必用欠くべからざるものとなります。禪書を繙かんとする者は。必ず皆此心得を持て居ねばなりませぬ。偖て斯の如くして。數千年來幾多の宗匠名門の書き列ねられたる禪書は頗る多く。何れも皆親切剴切宗乘の第一義を提げ來つて。嚼んで嬰兒を育するが如く。今日又た適來新到余輩の如きを煩はして強て黃口を弄せしむべき餘地とては。毛頭ないのが本當です。然も如何せん此等の文書は多くは。皆數世紀乃至數十年以前の言語を以て記述せられ。一見今日青年の耳目には入り難きものが在ります。豈に道はずや。所變はれば品變はり。浪華の葦も

余が本書を著はせる所以

伊勢の濱荻。顧ふに今日泰西の文物日に東漸し。青年の思想已に一新せる時に當り。しひて樣に依て胡蘆を畫き。何時までも。昔の符帳を用ゆるの愚なるを覺ゆるです。若かず速に舊を去り新に就き。今日流通の言語を以て。この萬代不易の一物を說き來らんには。此點に關しては世間必ず當に具眼の士多かるべし。唯惜むらくば具腕の士尠きことを。古人已に幾多の艱難辛苦を嘗め來つて漸く乾竹に汗を絞り多少の諸訛を殘したるに。未だ古人の手腕だも具へずして猥に之が改刪を試みんこと其弊害たる實に大なる者あるべきでせう。左りながら此道元來境に在つて言にあらず。境さへしつかり鍛錬すれば。甲と說ひても乙と說ひても。それは只だ境に行くまでの道筋でありますから。矢張何方かと言へば早分かりのする方が宜しいでせう。余輩元來淺學寡聞。況

古人の說と余の說との相異の例

や此事に於て研鑽誠に淺薄なり。敢て嗚呼がましくも。上章幾多の葛藤を打し來つて。胡道亂說。世を誤まり道を傷くること頗る大なるやを恐るゝのです。併し唯幾分古人の言語を翻譯して今日學術的の用語に代へて見たらば。古語を知らざる今時の青年に向ふて。又多少の便益もあらうかと曰ふ老婆心に驅られた譯で有ます。そこで猶試に古人の詞で說ひてある處を。今時の思想で說き直したらばと思ふ處を。一二例示して見ませう。第一。昔は五感のことを塵根と唱へまして。汚れた肉體に附屬せる極めて卑むべき者と見做して仕舞ふて居ります。從て此五感を通じて成立つた吾人の思慮分別は。到底清淨潔白なる佛地に到着することは出來ないものであるとして居る樣です。併し今日化學の進步したる世の中に天地萬物總て皆元素の集合より成らざるはなく。獨り人體の汚れたといふ樣な道理の耳に入ない筈はないのです。それよりはもつと論理的に。五感から來に智識の誤謬多き所以が說明せられます。卽ち余輩が已に第二章に於て詳述いたしました通り。其足らざる處を補ふ所以の方法までも亦た日々案出せられて居るのです。それで一方では。其汚れた體が直ぐ其儘の佛であると說きまして。實際如何にも其通りでありますけれども。何故に一度悟入すれば淸淨に歸し。悟入せざれば汚穢なりや。此邊の處が兎角に古人の說話に曖昧なるやの憾があると思はれます。次に又古人は屢生者必滅。會者定離を說きまして。人は宜しく生滅會離を脫した處に安心せねばならぬと說いてありますが。是は勿論眞理で。宗敎としては。是非とも此の安心を得させねばなりませぬが。併し目前の無常を感じますのは。寧ろ老人か婦

女子に在ることで。從て靑年の御寺詣でなどは。國家の元氣を消耗せしむる恐がある。と迄。極論する人もある位です。此論の誤れるは固より言ふ迄もありませんが。併し何にも徹頭徹尾生滅會離を基礎として。浮世の果敢なきを說きませんでも。論理上生に對する滅。會に對する離。一に對する二といふ樣な差別比較に亙らざる處で。此宇宙を看察して。そこに始めて萬代不易の眞面目があるといふことを。指示することが出來るではありませんか。次に又差別の智惠を尊び過ぎる弊を論ずるを見ますに。多くは皆頭ごなしに。智者とか才子とか言つて。少し計りの理屈を云ふても。廣大無邊の天地に向ふて。どれ程の見透しがありませうか。五尺の蛆蟲が小才覺は到底その玄妙を盡くすことは望まれないのですなどゝ申します。併し今日學術旺盛にして之が爲めには身命をも拋たんとし。人作の天工を奪ふに近きもの亦た鮮からざるの時に當り。此樣な自暴自棄の言語が何として一般の承諾を得ませうや。此の如き言語を放つて得々たる人間は。宗乘の上から見ても或は一枚見識以上には行けなかつたのでは有るまいかと思はれるので有ります。試に見よ。柳綠花紅と打つて出づれば。實に是れ歷然明白なる差別で。其差別が更に一層の精を加へて。綠にも千樣萬態の別あり。紅にも深淺濃淡の差が現はれることが知れます。その綠を染め紅を作るに。何の藥を用ひ何の溫度に依ると言へば。已に是れ純然たる理化の學ではありませんか。それで實際惡るいものは。決して差別の智ではなく。世人が未だ體を知らざるに却て用の末にのみ走る處に在るのです。こんな事も實は唯だ說明の工合だけの事で。何んと言つても。已に握つ

禪の三昧とは心の純一なる無雜狀態を云ふ

たものが有れば。世間に出ての活動には變りも有りますまいけれども。未だ道に入らざる人を說くの語としては。決して賞すべき者では有りますまい。偖其次には今日世間の學者に向ふて一言して見度い事が有ります。夫は心理學上心の集中といふことが有つて。禪の三味も亦之に過ぎぬものとすることです。是の詞は一見如何にも能く分かつた樣に思はれる爲めに。多くの人が誤まられて。禪の上には至極迷惑の至ですが。世人も亦た少しく自分の言ふ詞の意味を考へて見たら何うでせう。一體集中とは何を集中するといふのですか。世人は心といふものゝ働き卽ち用は知つて居ますけれども。其何者であるか。卽ち體に就ては少しも知らないのです。從て心を集中するといふことは。實際唯だ心の働きを指の尖に限つて見ると云ふに過ぎませぬ。それで今常

赤	綠	菫
白	黃	藍
黑	樺	青

第一圖

赤

第二圖

人が常時に於て持つて居る心の働きを第一圖の如きものとして。是が忽ち或る一事例へば赤の上に集中したと致しますれば。其結果は直に第二圖の如くなつて來ます。心理學者も心に姿ありとは知らぬ筈であります。その集中と申します意は決して青といふ心。黃といふ心。などを持ち運んで唯一の赤の上にあびせ掛けるといふのでは有りますまい。然かも不幸にして集中と云ふ文字には寧ろ複雜ならしむるかの意味がありまして。其結果人をして往々赤白黑紫色々の心ありて相集合することあるを疑はしむるのであります。併し今之を第二圖の上から考へて見ますれば。今の先までも右往左往に攪き亂されて居た心

の働が唯一の赤となつて活動いたします故。實際此は複雜ではなくて簡單になつて仕舞つたので。心の純化と呼ぶ方が實に能く正鵠を得たものであります。此の純化の妙は身自らそこに行つて見なければ了解の出來るものではありませず。況や心をして純化せしめんと藻掻きます如きは寧ろ心をして却て反對に複雜に陷らしむる所以でありまして。此等は強て名づければ集中とでも申すべきで有りませう。心理學者の集中は果して何れなるかを知らず。兎も角禪の三味は事實上心の純化でありまして。之を修すれば心身輕安。四百四病を治して猶ほ餘りとも申します位で。安樂の法門は實に坐禪に限るです。然しながらその三味がもし心の複雜を意味するものでありましたら禪宗の坊主達は月を超へずして多くは皆病人とならねばなりますまい。尙ほ又茲に小兒か馬鹿かゞ有るとしまして。其心の働きは勿論

第三圖

常人に劣ること甚だ遠いので。例之ば第三圖の如きものと致ます。是が一度或る場合に忽ち赤に集中したと致しますれば何うでせう。若しその集中が赤の上に心が折重つたといふ事ならば。到底彼等の集中は常人の集中に及ざる譯です。併し此れも禪學者から見ますれば。心の活動の上てこそ彼此互に大なる相違を示すべきなれ。心の純化といふ上では何等の區別も有りません。左ればこそ賢愚老幼凡て皆同一揆に出づるものにして。均して共に平等の當體であるです。茲に最も面白いのは。昔し釋尊母の胎內より生れ出て。一聲叫んでオギャーと申しました。其聲が今に至て尙ほ響ひて天上天下唯我獨尊と聞へて居ることです。子供の集

中ても決して侮れないものては有りませんか。之を要するに心の集中を說くものは。單に心の働を論じながらに。識らず知らず一種の相を假想するの弊に陷るのてすが。心の純化を說く方もこゝて能く注意しないと。心の相を認めつゝ却て其相に即するの失が生じます。世の坐禪を論ぜんとするもの脚未だ三昧の境を踏まず徒に臆測を逞くして。或は論じて集中となし。純化をなす樣な事は愼て避くべきて有りませう

以上陳述しました處て。一應余輩の考を盡くした積りて有りますが。尙終に臨んて一言申添へて置き度事が有ります。それは坐禪と體骼との關係て有ります。夫れ坐禪は乃ち安樂の法門といふ位て。禪の境涯から云へば。心と體骼とは差別があつて差別がない。從て一身の安不安などは。實は心の

まゝに取扱へる譯て。古來より或は坐脫。或は立亡。能く生死を心頭に弄びたる事例も多く傳つて居ります。心理學者の說に。心の集中によりて。指の先きから出血するを見たと云ふ事を聞きましたが。それ位の事は禪では固より當然の事と認めて居ます。斯の如くして禪によりて身心の輕安を求めんとすれば。是又自然に出來てくる譯でありますが。併し坐禪にも中々八ケましい式作法がありまして。此用心を善くせぬ爲めに人往々疾を致すこと有りと。古來から言ひ傳へて有りまして。心の純化も無闇に爲さうとすれば。只だあせるのみて丁度前にも申しました反對の複雜に陷ちて仕舞ひ。目が眩ひ頭が痛むといふ次第に成ります。故に夫の大事畢了入鄽垂手底の大偉人は旦く措き。即今尙ほ修行中に屬する者は。所謂法味と身體と相須つて。始めて能く禪の安

樂の法門たる所以を全くするものと云はねばなりませぬ。坐禪の式に就ては。かの坐禪儀を始め其他多くの佛典中に記述せられ。又白隱の夜船閑話の如きも。人の盛に稱揚する所で有ります。そこで實に所謂衲僧てふものゝ身體の狀況は如何なる者であるか。四大輕安。精神爽利なる體骼は。醫學的果して如何なる價直を示すものゝ如きこゝに就ては。余輩は他日醫師の力を借りて。大に研究して見やうと思ふて居る所で有ります

相送當門有修竹。爲君葉々起清風。

蘇

虛堂

禪學論 終

禪學論

不許複製

明治四十四年八月二十日印刷
明治四十四年八月二十三日發行

定價金五十錢

著者　近重眞澄

東京市日本橋區吳服町八番地　發行者　服部國太郎

東京市日本橋區吳服町八番地　發行所　服部書店

東京市京橋區大鋸町十四番地　印刷所　北澤活版所

發賣所　東京市日本橋區吳服町八番地　文泉堂書房
振替東京（二〇七七六番）

樂の法門たる所以を全くするものと云はねばなりませぬ。坐禪の式に就ては。かの坐禪儀を始め其他多くの佛典中に記述せられ。又白隱の夜船閑話の如きも。人の盛に稱揚する所で有ります。そこで實に所謂衲僧てふものゝ身體の狀況は如何なる者であるか。四大輕安。精神爽利なる體骼は。醫學的果して如何なる價直を示すものであるかこゝに就ては。余輩は他日醫師の力を借りて。大に研究して見やうと思ふて居る所で有ります

相逢當門有修竹。爲君葉々起清風。

蘆堂

禪學論 終

禪學論

不許複製

明治四十四年八月二十日印刷
明治四十四年八月二十三日發行

定價金五十錢

著者　近重眞澄

東京市日本橋區吳服町八番地　發行者　服部國太郎

東京市日本橋區吳服町八番地　發行所　服部書店

東京市京橋區大鋸町十四番地　印刷所　北澤活版所

發賣所　東京市日本橋區吳服町八番地　文泉堂書房
振替東京（二〇七七六番）

文泉堂發賣禪學書類

●理學博士　近重眞澄著　**參禪錄**　正價六拾錢　送料六錢

世の庸捧與麼に徹困なりと雖も他の僥古に因らずんば爭奈てか上座の障綠を俳せん。著者一隻眼夙に作家の爐鞴に入る。一枝の靈筆巧に禪要を講說し剖折剔抉些の余蘊なし所謂氣鐵牛を呵し蚊嘴も亦之を下すに容易ならしむる者が特に其論據を日新の科學に取り以て現代人文と接觸する所以を明かにせるが如きは則ち著者苦心の存する所にして前人未發の見蓋亦尠しとせず。世の參禪に志ある士乞ふ必ず一本を購ひ以て座右の友とせられよ

宗洞大學講師
忽滑谷快天著　**樂天生活の妙味**　正價七拾五錢　送料八錢

著者曩に禪學批判論禪學講話禪の妙味等を著はすや、世人渴に飯を得たるが如く擧つて是に趨ぎ爲に何れも數十版を重ねて讀書界を風靡したりき。然るに今又本書を著はし以て逆境に在る者の爲に說かる即ち　●貧中の妙趣　●病中の妙趣　●不幸中の妙趣　●逆境の妙趣　●不如意の妙趣　●害惡の妙趣　●死滅の妙趣是也前後七章何れも先生が過去の經歷より出て句々心血の凝結せし所引例古今東西に涉て豐富、行文平易流暢にして趣味律々通讀兩三回にして大語するの感あるべし

●森大狂著　**禪學一夕話**　正價八拾五錢　○洋裝美本全一冊　送料八錢

79
357

79
359